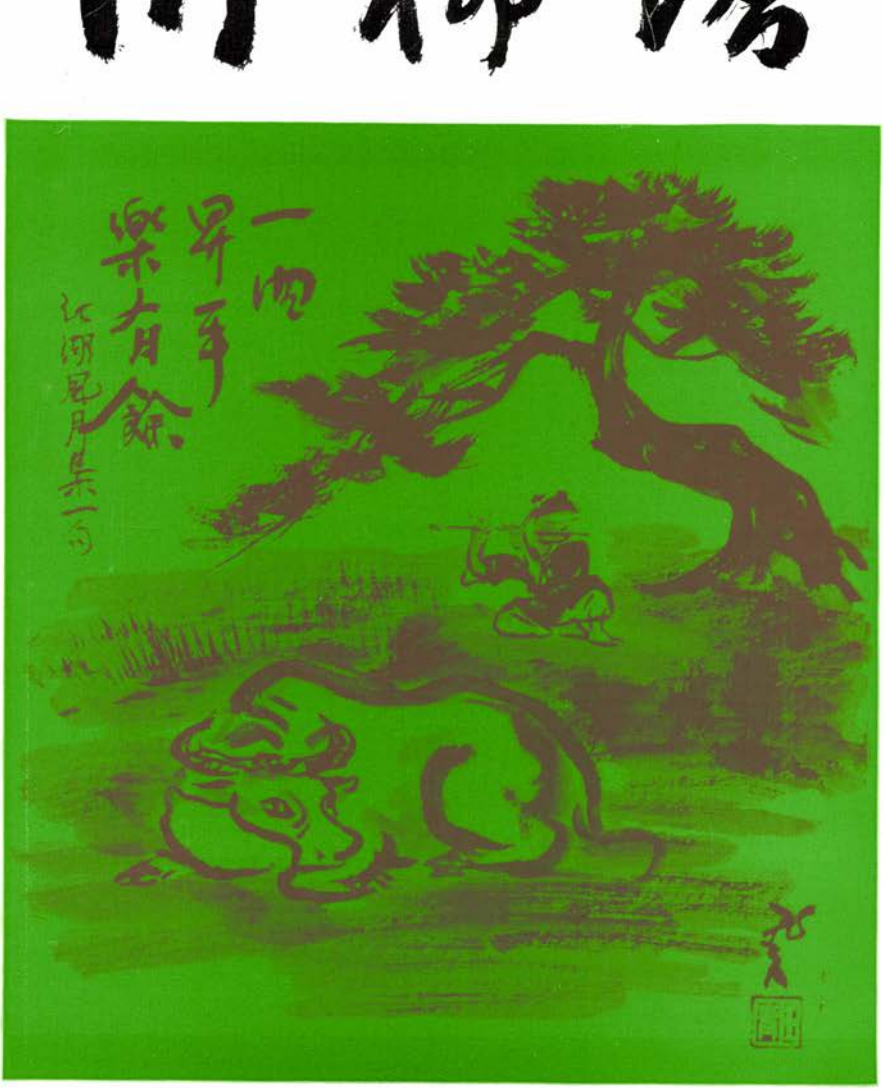
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十七年十二月二十五日　印刷
昭和四十八年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五四八号



No. 548

川柳ゆーもあ特集

一月号

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛



超特撰（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

国立公園　奥新和歌浦・雑賀崎



国際観光旅館
うおまたろう
魚又楼
風光明媚な海岸美を誇る
TEL 和歌山（44）0431・1186代
大阪案内所　（641）3564

頑張りましょう今年も同じご挨拶

たった一行素敵な文字の旅だより

まばたかぬリズムで除夜の鐘をきき

探しもの探し疲れて妻眠る

無作法で不気味なままの年が暮れ

中島生々庵

年頭感

堀江さんの世界一周マーメイド二世号が雄図むなしく救助船に曳かれて鳥羽に帰りついた。一点のすきもない研究や準備の上での出発だったろうに、こうした事故が起るのである。このニュースを聞いて今更のように私は私自身の日々を考えてみた。計算したスケジュールもなく、その上どこに行きつくというあてもなく、ただ、めくら滅法に波のまにまに大海原を泳ぎ喘いでいるばかりの私の姿ではないだろうか。豊かで平和な世の中とは外見だけの姿で、ほんとうは空虚で、不満で、傲慢で自分を見つめる事等は、とうの昔見失って右往左往、逃げ出しもならず、さりとて救助を求めるSOSは私のプライドが許さぬ等とほざく。何とか荒波の中を泳ぎ続けて毎年毎年があわただしく過ぎてゆく。年末になるとこれでは駄目だ、来年こそはと恒例のご挨拶。地獄の赤鬼どもが苦笑していることだろう。鬼に笑われてもいい。ことしこそ新しい一日一日、大切に生き甲斐を見出す努力を励む事にする。

座右の句

凡聖一如　元旦の心しる

（路　郎）

私の句

元旦や我泰山の如く座す

西尾　栞

川柳塔新年号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

年頭感……中島生々庵……（1）
丑歳に思う……若本多久志……（2）
川傍柳初篇研究……（百十四）……（24）
前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唖三味・丸博美・藤井和雄十府・岡田甫
新春のご挨拶……中島生々庵……（22）
俳諧宗匠ここにあり……東野大八……（26）
川柳塔（同人作品）……西尾栞選……（4）
水煙抄……菊沢小松園選……（32）
一分間の柳論……橘高薫風……（42）
川村好郎……（45）
秀句鑑賞……（同人吟）……川村好郎……（52）
（近作柳樽）……浜田久米雄……（53）
新年吟について……正本水客……（28）

丑歳に思う

若本多久志

夏目漱石が友人への書簡の中で「牛になることはどうしても必要です。我々はとかく馬になりたがるが、牛にはなかなかなりきれない。あせってはいけません、根気ずくでおいでなさい。世の中は根気の前に頭を下げることを知っていますが、花火の前には一瞬の記憶しか与えません……云々」と記している。

昨今のあわただしい世情の中で、いつもいらいらしている我々にとって、まことに蘊蓄のある言葉である。幸に丑歳を迎えるにあたって、今年こそ牛になって行きたいものと、まず牛の句を拾ってみた。

今日中に着いたらよいと牛思い　路　郎

前前、漱石の言葉を句にしたようで、生前の先生をしのぶにふさわしい作品である。

御所車ひもじい牛と思われず　新　水

昔、公家の貴人たちが外出に牛車を用いる場合、行列の途上で汚物の排泄をふせぐため

一月元旦（告白の巻）……麻生葭乃……（31）
近詠……諸家……（21）
川柳の笑い……北川春巣……（44）
川柳ゆーもあ特集……諸家……（46）
大阪文化祭川柳大会……谷垣史好……（54）
正月……不二田一三夫……（42）
雅号ぶっちゃけばなし……細呂木魯木……（43）
初歩教室……**本田恵二朗**……（58）
大萬川柳「あと味」……川村好郎選……（60）
柳界展望……（新之助）……（62）
本社十二月句会……（庸佑）……（68）
各地柳壇……（文秋）……（71）
一路集　「初荷」……天正千梢選……（56）
　　「国旗」……吉岡美房選……（56）
　　「新調」……福島鉄児選……（57）
編集後記……（一三夫・葉子）……（72）

座右の句

寝転ろべば畳一帖ふさぐのみ　（路　郎）

私の句

いつの世に俺に御光のさすことか

菊沢　小松園

に、飼料を制限したり、一時中止したので実はひもじい牛なのだが、堂々たる体格がそれを思わせないと詠んでいる。しかし古句に

迷惑なものは祭りの牛ばかり

というのがあって、美しく飾られた牛にも苛酷な労働があったようである。

牛の気に任せたように牛を追い　しとし

馬は曳くと言い、牛は追うというが、この句いかにものろのろと歩く姿が眼に浮ぶ。だが、牛はいくら追われても、イヤだと思ったら、テコでも動かないのが面白い。

牛いつもロースのあたり叩かれる　句軒

「その辺は大事なところだぞ」と思っているのに、役牛の悲しさ、いつも同じところばかり叩かれているのも哀れである。

ここが美味いと撫でたら牛がふり向いた

人間は牛さえ見れば、ステーキや、すき焼きのことしか連想出来ないのか。この句なかなかユーモアがあって面白い。

牛の目に日本人はこざかしい　花王

近頃の牛は、イザヤ・ベンダサンのような批判をするようになったらしい……。

角二本牛にも自衛力があり　塔泉

四次防を攻撃する野党に対し、田中総理はこの句を引用して説明すれば、みんな、納得したであろうに。



西尾栞選

松原市　谷垣史好

きょう一日を笑わなかった守衛
はんば物の売場へ西陽よう当り
土建屋のセンスで国を治める気
ひとまわり若い社長の気焔きく
除夜を待つ炬燵に万太郎句集
胸いっぱい吸うても僕の片肺よ

大阪市　本多柳志

敵方へ廻せば怖い人へ酌ぎ
借りる嘘貸せない嘘は見ぬかれる
正体は旅をいっしょにして掴み
天皇さまも上手くなられた日本語
公害を吐く煙からも詩が生れ

祝正朗氏還暦

娘に酌がせ妻に酌がせて祝い膳

堺市　河内天笑

今そこで会釈したのが空巣なり
元栓をどろぼうさんが締めてくれ
右左見てたらうしろからやられ
断絶の一歩手前で嫁く話
お金持ち減るのがこわい日が続き
また元の喋りになって御退院

香川県　三井酔夢

祖谷に入る（四句）

残党のあわれを語る水車
落人に出逢うときめき　かずら橋
思慕こめて小石を拾うびわの滝
つかの間の詩人こんにやく買い漁り

吾妻徳穂踊る（二句）

けんらんと恋狂いする道成寺
舞踊家のきびしさ老いのない楽屋

竹原市　森井菁居

いかにせんとて手近なる酒へ逃げ
春夏秋冬生きていてこそ生きてこそ
決断をせかして溶ける角砂糖

底辺に生きる安らぎかも知れず
バラが散るみだらを性として見つめ

足摺にて

すべて絵に尽きる怒濤を見てあかず

青森市　工藤甲吉

大臣の口旅先でよくすべり
他人などそんなもんさと他人言い
一短ばかり一長はみてくれず
青森の秋熟柿を所望され
そんな頬ぺたをリンゴの町で見る

大阪市　正本水客

白桔梗秋も名残りの砂にする
虹鱒の競うて秋陽はねかえす
真昼の陽　石垣の苔へとどかない
叩きつける言葉の一つあたためる
百聞一見まだまだ若い気をすてず

大阪市　小出智子

「恍惚の人」われに父あり母があり
綴り合わす過去は悲しい母の詩
心すでに妥協している迎え傘
四季感がないとは言えど菊を買う
紫を着るには心貧しすぎ

門真市　福島鉄児

ぼちぼちと本音を吐かす酔加減
和服着て女は作るものと知る
一瞬の表情読まれている対話
喋らせておいてぼろ出す時を待ち
家中の中を次々と廻る孫

八尾市　高杉鬼遊

神主の頭を下げるように下げ
病院へ仕事を遁げて来た男
負けまいと薄い財布がレジへ立ち
真面目男の恋の話しだ笑うまい
真実を小出しに嘘の街に棲み

東大阪市　宮西弥生

骨まで愛しましたとカマキリの恋
幸福に遠い女の夜が長い
情熱が冷めたら聞える虫の声
桜貝童話の海のない欺き
道のない道を夫婦だから歩く

宝塚市　傍島静馬

趣味の人などと云われて半可通
お手料理酒で流し込んでるとも知らず
マンションの合鍵女房に勘付かれ
竹割ったような男にゼニが無い
許す気へ下げそうもない石頭

倉吉市　奥谷弘朗

大詰に来て生甲斐を見うしない
民主主義くだらん会が多すぎる
パチンコにファイトを燃やす小役人

結ぶ実は土のぬくみを疑わず
蓋付きの夫婦茶碗を大事がり
出雲市　尼　緑之助

改造論選挙新聞読み捨てる
民放の画面溜息となる文化
公害を作り公害をわめきつつ
点と線結んだだけの改造論
ひとりの寝酒しじまは限りなき
泉佐野市　阿万万的

秋にとけかねて田園ハイウェイ
三度目の民宿むかご飯よばれ
煙は煙でもD・51は画にされる
ここに坐ってこう見るのです竹の庭
褐色に沈み雪待つ過疎の村
倉敷市　野田素身郎

枯葉鳴る気まずい別れとはなりぬ
妹の釣書を書く秋深し
悪友がきれいに空けたナポレオン
年甲斐もなくボウリング優勝す
株の行方選挙のゆくえも気にかかり
鳥取県　鈴木村諷子

石の値に金のねうちのない世なり
飲んで食うて今日をたのしむ俗に居る
朝寝するための農具となり果てる
百姓に百姓の朝賜わりて

倹約は損な美徳と覚えたり
竹原市　山内静水

いまにして思えば素手でした勝負
語ることなし語ってほしい妻
声をそろえて叱ったことを子に詫びる
思想とは別万才を叫ぶとき
戦争反対引き金を引いた指
八尾市　香川酔々

将棋譜
定年の歩が一つ消え二つ消え
棒グラフ香車は町へまっしぐら
通天閣あかりが曇り銀が泣く
ご先祖の美田と替えた金二枚
四面楚歌ついに裸の王となり
岡山県　浜田久米雄

ベトナムの和平は空をかけ巡り
歩くことしゃべることすこしいやになり
食い下るだけ野党の取柄なり
二車線の国道事故とすれすれに
愛車から凶器と変る不倖
大阪市　大坂形水

正月を逃避ホテルをとってある
大臣の新邸国民無いがしろ
大臣の年頭所感眠くなる
箸紙も夫婦と末っ娘だけに減り

元旦の夫婦に同じ想うこと

豊中市　戸田古方

けったいなけったいな広告やから目立つ
ウーマンリブ爪尖らして尖らして
画廊昼解けのわからぬ会話する
表現の自由インテリアとかいうて
日銀の庭に色づくものありて

倉敷市　本田恵二朗

崖下にあわや落ちそうに松のぞく
自動巻が止ってしまうほど眠り
老妻の忘れっぽさが笑えない
掘りさげてみたら初心につき当り

長男渡米

アメリカで飲み過ぎるなと親ごころ

高槻市　若柳潮花

陽溜りで女は好きな色を編み
裏方へ師匠の楽の腰を折り
栗を焼く匂い箕面の夕時雨
扇獅子鈴も狂うた音で鳴り
毛振りまで対の禿が間をつなぎ

高槻市　福田丁路

マイカーも霊気も満ちる高野山
仮借なき生きる掟に身が縮む
時のはずみで甘い口づけ
突然の客に素顔の妻あわて

狂い咲く還暦過ぎた姥桜

松江市　小林孤呂二

会津若松にて

赤べコの由来へあやかり土産とし

山形にて

東北なまり出雲なまり温む夜

国鉄仙山線にて（一句）

陶酔の車窓は紅葉の色となり
座りだこに見る人柄を信じけり
剃りあともさわやか「ひかり」指定席

神戸市　小浜牧人

無為に日を過ごしていても髭は伸び
信号の赤へ理性を取り戻し
伝統の重みで養子痩せている
神話壊してスカイラインが延びてゆく
十二月神父も人間臭くなり

松江市　吉岡遁児

交替で出る日休む日松の内
金婚へ発車今年は二十六年目
賀状見やりながら雅楽の調べ昼近し
久々に息子夫婦と酎むも新春
ともかくも生きねばならぬ初日の出

和歌山市　垂井葵水

朝鵯へ一度は拍手してやろう
鈴鳴らす今宵は銀に染めた爪

往診の鞄雛の間通り抜け
リンゴ三ツかなしきまでに夜を匂う
挑戦として気取っていた不覚

倉敷市　小野克枝

正月の花美しく引き締まり
目標に向いて休みを知らぬ足
健康美と云って女をよろこばせ
拾い物届けた話夕餉の子
誤診の窓口に遠慮なく取られ

呉市　林野甦光

すきな事して褒められる菊日和
上げ底の弁当で団体昼がすみ
ゼッケンの一は早さにこだわらず
親に似ぬ子ですと母の威張りよう
爪染めて漬物石に叱られる

桜井市　岩本雀踊子

冬真近か動きのにぶい金魚鉢
かかわりのないのに世間ほっとかず
疑いを持たぬ友と酒を飲む
神様に覗いてもらう欲をもち
庶民の味に狐と云ううどん

米子市　林瑞枝

子に縫うたその手で孫へ縫う晴着
バスを待つ足踏み雪はまだ止まず
Uターン出来ぬ人生が今日も暮れ
夫婦とは悲し不機嫌受け止める
労働力でしかない祖母おむつ干す

宇部市　石川侃流洞

真直う生き抜く筈と板鋏み
ストーンと苅る手へ秋の陽が落ちる
冬の陽へ土塀がぬくい城下町
風邪ですなどと代診頼りなし
仲よしの通勤同じレース編む

岩国市　弘津柳慶

新宮、串本方面へ出張
石段の凹みに社格偲ばせて
露天風呂はだかでバスへ手を振って
俗化せぬ山の温泉に月が冴え
橋桁を境に県道の違い見せ
ダムからをはっきり川の色を変え

倉敷市　水粉千翁

祝、川端重雄氏通産大臣賞受賞
斯く重し大臣賞の秋晴れる
川端柳子さんの内助（一句）
松さかん根締めの菊の白きまま
問題になって遺憾に堪えません
友情の盃一つだけで足り
よろこびのある日わたしの空にする

富田林市　岩田美代

髪梳ける如く青さのない柳

湯どうふやひたすらものを恋う心
炎えつきて曼珠沙華のなお佇てり
思い切りおしゃれしてみる秋を出る
雨を聞く働く事の安らぎに

大阪市　金井文秋

若い気でいるのに老人手帖来る
食えるだけあればと老いの欲も減り
コマーシャル女の夢は果てしなし
策士にも欲がからんだ読み違い
お祝いも香典もサインペンという時世

兵庫県　遠山可住

晩酌がつづいて読書にならぬ秋
日曜の汗を外貨に叱られる
四十の無理はまっすぐ腰へ来る
五十才僕も白壁塗り替える
補聴器がよみがえらせた秋の音

大阪市　河股緑水

柿むいて子のあやまちにふれずおく
気ままには暮せぬ今日の靴を履き
父に似た弱気を父に励まされ
手折らんとして薔薇の刺に触れ
美しく死にたい虹の消えるよう

島根県　堀江正朗

羨んでもらえる子持ち貧しくも
襖越しそんな事とも知らず座し
左だと言えば左を向く素直
羅漢ほど瞼の中の人を追う
うっかりと共鳴したら跳ね返り

西宮市　島居百酒

みちのく旅行

八甲田紅葉の影に宿る悲史
奥入瀬の十和田の水を染めて秋
はかなさよ芭蕉を偲ぶ中尊寺

四国旅行

一豊の妻を讃えて高知城
源平を偲ぶ屋島の大ホテル

新宮市　川上大輪

冗談を言うなと本心笑われる
マネキンの少し乱れている色気
阿呆になることも忘れぬ母達者
激論は良いが結局白紙なり
表札の雅号へ息子さんですか

大阪市　橘高薫風

元旦ぞルパング島も元旦ぞ
父の忌に障子の部屋もなくなりぬ
愛人を帰して斗志一転す
当選をしたら鰈を裏返し
寡婦の買う数珠のような首飾り

大阪市　不二田一三夫

踏まれてからそれが養足だとわかり

心の底をわざと覗かせてみる
カラーテレビ買うてからきみとこカラーかカラーか

寄　席

出番までパチンコへ行く老芸人
長生きしすぎたとおもう老芸人

尼崎市　黒川紫香

三人で一本女中もそっと逃げ

安　土

ハラハラとただ落葉する安土城

観音正寺

ドングリを拾い石段をまた見上げ
息ついてろうそくあげる観音寺

大阪市　福井野迷路

勲章をいのちにかえてみた重み
顔の痣見えない側に立つ好意
美味悪口舌の因果な生れつき
耳よりと上目使いがうまが合い

大阪市　西出一栄

幻想の美女にまみえん紅葉狩
ブランコの余振まだある夕まぐれ
ホーム炬燵にコードをつなぐ今朝の冷え
倖へ妬みはついてまわるもの

岡山県　直原七面山

媚を売る女と媚を買う男
そっとしておこう失恋した娘
それぞれの女　それぞれの匂い持ち
蟹両手を挙げて大空を支え

大阪市　山川阿茶

やせ我慢張る意地もなく秋一人
おだてにものれぬ自分を淋しがり
色彩のよい落葉ゆえ拾い上げ
襲うよう鳩群れ下りる朝詣り

島根県　藤井明朗

ふる里が恋し就職Uターン
追えば逃げる幸せをあきらめず
教育万能親の考えかみ合わず
筆無精のまま越年へ悔残し

鳥取市　河村日満

義弟逝く（二句）

酔うて寝た顔そのままの仏にて
世話好きの世話し残しのまま逝かれ

津市にて（一句）

城趾の砂利道お犬様に会い
菊人形今年は平家物語り

高槻市　福田丁路

昭和四十八年元旦

老いてなお多忙極める年が明け
初春を飲んで寝る人稼ぐ人

日中国交回復

日中の握り合せた手が痺れ

洛西嵯峨野にて

祇王寺の苔蒸す庭に舞う紅葉

神戸市　仲　どんたく

手づくりの味とは云えどパパの鋸
更けし夜のパパの風呂場の不協和音
布一枚張って手相見店が出来
一刀彫りのごとく処理するおそろしさ

高知市　川竹松風

十二月別れ話を持ち込まれ
どんぐりを孫とひろえば歌が出る
立話影がだんだんのびてゆき
指定席のように猫が膝に来る

岸和田市　高橋操子

腹割って話せば妥協するものを
枝折りも添えて頂く柿の出来
見て楽し舞妓のような京の菓子
結城着て男ざかりの肚が出来

愛媛県　渡辺暁童

四女容子結婚

ひさびさの墨の香となる荷目録
日本に還れ日本の日本人
ゴキブリの多さ革新何と見る
あぶなげな恋をテレビは成就させ

笠岡市　木山遠二

飛石になって文化の日が愉し
初心忘れずされど老化を如何にせん
不運にも慣れ下ばかり見て暮らす

老人会

まめなのが一番よいと思う今日

名古屋市　吉田水車

変人のたまに笑えば笑らわれて
ポスターだけが笑顔で迎え
ゴム判の日付を変えて身構えた
古都の旅ガイドの話ことかかず

今治市　越智一水

いっそ灯をおろして秋を親しめり
嘘つけぬ男が嘘を言うてばれ

飛騨高山にて

高山に来て公害のことわすれ

白川郷にて

素朴な美を秘めて合掌造り建ち

岡山県　大森娯句楽

金婚の春婆さんの猪口を受け
春夏秋冬変らぬ苔の佗びを見せ
幼稚園稽古に欲の無いピアノ
女の子よくある話途惑わせ

松江市　中川晃男

ヘルン旧居は松江の秋の底に冷え
ニッポンのこんなミドリに会える旅
キリリシャンと秋の帯を締め

お社がビルの谷間に埜ちこんで
倉敷市　小幡里風

夜勤明け鉄匂わせて昼を寝る
ソロバンで弾じかれた僕の百分比
気のはずむ音本絹の帯をしめ
イメージチェンジ拭いた鏡の位置を替え
姫路市　梅谿庵不酔

田も畑も入れて銀行ヤツと貸し
病名を言うなと医者が呼ぶ身内
聴診器医師と婦長が目と目と目
大晦日バチ（笠）を被って鯛が着き
藤井寺市　西いわを

代筆の智恵半分は交って居
舅の眼そらし嫁のバスタオル
宝物のように女を褒めちぎる
人丸神社
人丸の歌碑に明石の海写る
京都市　松川杜的

唯座して比えいを眺めて円通寺
天皇の名が過去帳に円通寺
秋深しすすきをアップに持って来る
飛車一つ疵うて成歩にしてやられ
守口市　村田瓢太

泣き叫ぶ遺族にカメラ容赦せず
心暖かい証拠と冷たい手を握る

お早ようしか言わぬ九官持て余まし
ご試食へ一巡りしてまた覗き
松江市　岡崎祥月

家平和金とは別な味がする
十人が十色句の味句の匂い
夕もやへ方向音痴つき当る
改築の新居ハッピーニューイァー
伊丹市　小川静観堂

おとことおんな　とかく裏のまた裏
僕の胸無憂華有憂華の花盛り
われ八十四その延長線上恍惚が
スープの醒めない距離に恍惚の人と対す
岡山県　池田古心

女にも意地あり此処より通せんぼ
毒舌へ反撥出来ぬ愚に自嘲
巡回文楽観賞
文楽へ観客頭振り乍ら
帝釈峡紅葉狩り
帝釈峡奇峻に奇木に紅葉映え
姫路市　大江秋月

初春へ雪化粧して姫路城
旅楽し旧仮名づかいの道しるべ
定員と別に国鉄切符売る
沿線の子等に応えてやる気笛
美禰市　安平次弘道

嵩ばったものに休日の夫

夢のない顔停年の辞令受け

筆不精電話がついてなお不精

スモッグの空をけなげな渡り鳥

岡山県　浜野奇童

エキサイトしていくニュースへ入試の子

大学へパスしてポルノだ革命だ

ＰＴＡ口八丁のまま動き

裏切ったぼくを足音を追うてくる

平田市　久家代仕男

ハイジャックドンキホーテの日本版

コンパクトのぞきためらう白い嘘

押し流されそうで仕あわせ口にせず

過疎に居て客に見せたい菊が咲き

米子市　八木千代

小刻みに慕情走らす秋の雲

いたわりの言葉にうるむ夜なべの灯

育児法素直に姑を立ててくれ

つつましい灯にも仕える箸枕

大阪市　川口弘生

当り歳六分の四が過ぎて居た

姉女房平均寿命を楯にとり

日歩なんぼに遠い世界の顕微鏡

水槽に住めば胸びれ忙しい

大阪市　天正千梢

次第に小さくなりやがて消える夢

神の摂理にさらさらさらと流される

実現不可能へ情熱うしなわず

知欲の前進に実験連続し

大阪市　中川滋雀

白砂村荘

一木一草画業ととものたたずまい

ふんぎりをつけ残り火にかけた意地

多趣多芸底の深さを覗いただけ

エスカレーター上ればご婦人用売場

大阪市　河井庸佑

謙譲の美徳とやらで先越され

参観日きょうもかあさん来んじまい

正論が隅へすみへと追いやられ

反省はしてるが妥協はせぬつもり

出雲市　原独仙

出稼ぎを戻さず稲刈機を恨み

無職われ髭剃る暇のないでなし

二連発失敗犬が舌を出し

去る者は追わぬ強気が元の鞘

大阪市　有信新之助

アイスホッケー

氷上に力があふれホイッスル

ゴムの木がそろそろ困る丈になり

損なとき死んだと話す一周忌

石やきがネオンに奏でる不協和音
鳥取県　清水一保

下宿屋の窓から想う故郷の秋
多忙ふと脳裡かすめてゆく詩情
農政に甘えた過去とは知らぬ稲
精一杯生き続けたる老女の腰
岡山県　横山一声

日曜日だけ百姓をして米がとれ
売る方が恐くなる程値が上り
工事のおくれ値上りのせいにする
お酒飲む金は上手にくめんする
大阪市　江城修史

言い勝って秋の夜長を一人居る
老らくの自惚れ残り火が燃える
斗病の長きに尖る言葉じり
合鍵の温くさに触れて女陥ち
大阪市　児島与呂志

黄昏の町影追いかけている空虚
雑草も根だけに成って冬に耐え
逢うて見りゃ便りで感じたままの人
偶然をつくって老いらく今日も逢い
守口市　羽原静歩

保母の背に流れる冬陽あたたかし
童心のトライアングル鳴り続け
正体をチラリのぞかす花名刺
カンカンとランランちゃんへ明けの春
大阪市　神谷凡九郎

素顔の自分鏡に写る僕じゃない
うちの奴と云う奥さんが居る強み
無表情な顔がこんなにもこわい
君に何を残したか僕という存在
岡山県　出原敬一

出稼ぎが戻ってからの身だしなみ
点字習う施設へ赤い花が咲き
浜からの行商秋の陽に追われ
四次防の裏面子のくび締めた記事
大阪市　西川誓二

募金箱で私の銭も音を立て
願いごとないけど通り抜けたい法善寺
奇遇ですなと変身した二人
老舗伝統に生き孤高の味守る
鳥取県　森田布堂

結ばれた二人を菊の庭で撮り
遺骨まだ還らず墓に落葉する
肩書をつけて故郷の墓参り
天皇も歎き給いし松の色
堺市　吉岡青香

謙遜のような自慢を聞いてやり
七曲り一ツ一ツに人生語
この香り思い出してる女の勘

入院

哀れ声出して秋の蚊たたかれる
東京都　増田次章

幸運がつづき怖れもまだつづき
学者のポーズ何ごとも悲観論
都会人良さの一つに不干渉
見たことのある瞳からんでつとはなれ
東大阪市　竹中肖二

淀屋橋下りて分れる共稼ぎ
枚方の菊が並ぶも淀屋橋
物好きなことと苦吟を笑われる
苦吟して夜更かしをする老夫婦
東大阪市　竹中綾女

有馬路の白鷺一羽に騒ぐバス
立杭焼の茶色の壺に魅せられる
播磨清水寺にて（西国二十五番札所）
南無観世音十八丁もなんのその
（人造湖）
東条湖の中に祠だけ残し
広島県　高橋鬼焼

赤い傘赤いしずくの詩があり
暖房へ花瓶の水のかわきすぎ
灰皿へ女のかんだガムをため
秋の灯へ話す事なくドラマ追う
八尾市　飯田悦郎

恢復にむいたか看護婦すぐ来ない
ガンでない手術に朝の陽が届く
売店で会う看護婦の束ね髪
看護婦のリレー夜勤も血が通い
松江市　恒松叮紅

時雨れてる車窓に淋し無人駅
三味線に小さな意地をもつ女
握手してみたら人間らしい人
Uターンしたとこ妻に見付けられ
京都市　都倉求芽

玉すだれやたらに揺れる客がありすき焼の湯気倖せな顔濡らすビニールの袋に家風も詰めて捨て艶やかな女文字でくる回覧板
松江市　柳楽鶴丸

活けた花に心の乱れ教えられほほえみを草花から教えられ百薬の長のみ過ぎて死んだ性教育どうなさいます皇太子様
大阪市　室谷徹舟

年始から帰れば年始待っていた意気込んで行ったが口で丸められ残り火を労っているビタミン剤伝説を科学らしい割り切りよう
新宮市　大矢十郎

石焼芋道を遙かな身ごしらえ
冷え性の女房にいつか早い冬
お産なら良いが夜更けの救急車
煙草屋があって略図へ物わかり

大阪市　宮尾あいき

籠を出たオオムの足にあるくさり
襟元に素性がのぞく身のこなし
実感の無いまま夫の一と七日（夫の死）
寝煙草の跡　そこに夫が寝ていたに

愛媛県　村上旭童

そこここに送るとこあり密柑熟れ
農繁し土工半分程休み
雁来紅まだまだ秋の炎持ち
関白の名で父さんはほっとかれ

竹原市　小島蘭幸

本日の恋はここまでという握手
彼ったら仕事の話ばかりなの
良い方へ連鎖反応してくれず
つきつめてゆくと淋しくなるばかり

岡山市　川端柳子

青春のうしろ姿に風車
母さんはそれでよかった戦時中
御夫妻の言い分無色になって聞く
言うことがないのでただただラッキーです

倉敷市　竹内翁童

言い合った後のわびしさ救う闇
その自信もしや左遷へ直行か
ライバルを求め続けてきた栄光
息切れはすまい幸せ待っている

笠岡市　松本忠三

千円で顔をたてるとたてないと
垣根越しやってますなの声がする
第三者の示談当事者宙に浮き
火の気ない部屋で悲惨の記事を見る

島根県　小砂白汀

放たれて風船あてもなく昇り
何んにでも染まる白紙のたよりなさ
ちぎられて雑草種をまきちらし
秋風にみがき抜かれて菊の白

岸和田市　葛城伊三郎

此の御恩肝に銘じてそれっきり
性別を確めてから物を聞き
風呂の蓋見たいな仕事云うて呉れ
鍬だこの手からこぼれて行く我が子

和歌山市　野村太茂津

割り切った芸を見せ場で脱ぎに脱ぎ
嫁く決心へ優柔不断の父となり
かえりみて悔はなしとは嘘の嘘
自嘲などしないと決めた夜の自嘲

富田林市　木村弥栄子

その中の仮面が顔に根を下し
雪どけへ心の傷のむずかゆし
前向になって自分を手に入れる
マスコミがそのプロセスへメスを入れ
　倉敷市　谷井扇水
溜息が総べてだと見た読みの浅
冗談でいなし微笑で食い下り
健康を財産とする靴がチビ
信じ切る同士欠点見い出せず
　生駒市　草深酔升
名も知らぬまま通勤の顔なじみ
クラス会みな一流の顔ばかり
ささやかな小菊で見事調和とれ
　初孫男子誕生
御先祖も聞こし召されよ呱々の声
　富田林市　浅川八郎
招いているお招いている仏様
好きな酒雪の褥の阿弥陀仏
べちゃくちゃと女子はうるさいだまっとく
死期既に来ている筈に何の業
　富田林市　和田維久子
　寒霞渓（二句）
ロープウェーゆれて錦もゆれて見え
紅葉にも人出にも酔う寒霞渓
あてがあるようで無いよな暮しかと
七五三親子のファッションショーのよう
　東大阪市　斉藤三十四
鶴橋のホルモンへ途中下車
定年へ根性一つ持ちつづけ
銀婚を子に送られて空の旅
　日光観光
三百年甚五郎の猫よう眠る
　堺市　高橋千万子
結納のダイヤに夢が大きすぎ
吐き出した真珠の価値を知らぬ貝
電話では断わられそう訪ずれる
腹立ちを明日という日へ袖だたみ
　島根県　大森孝華
背伸びして人一倍の知恵しぼり
ふり返る足跡にある七転び
脱孫へくるめ絣の肌は秋
ふる里の土ふむ友にある仮面
　堺市　伏見茂美
帰省せぬ訳は只今恋愛中
秋の私語かさびしき音で落葉の舞い
散歩さす犬も早足秋の陽に
巡拝も寺の古さに気が和み
　松原市　玉置重人
ごきげんの悪さも妻に似る娘
信心をしてて不渡りつかまされ

平社員妥協する気のない闘志
無理言うて言われて友のありがたさ
大阪市　黒田真砂

義理重き垣根へ自分見失い
嫁かぬ子にうれし悲しい母心
愛憎の岐路か秋雨の煙る町
白菜を漬けて満ち足る小さい幸
鳥取県　川崎秋女

大山一泊吟行
煩悩を絶てとお山の鐘が鳴る
我も欲もすててくつろぐ紅葉山
今日からは姓が変った娘の呼び名
思い出をたぐれば茶漬の音がする
島根県　景山綾美

機関士のプライド停止位置ピタリ
トトトン・トトトン夜汽車単調な音続く
浴衣着てお座敷列車朝になり
通勤車恋の視線がからみ合い
島根県　中島英子

執着が安政からの家守る
菊に招ぶ今年は喜寿の誕生日
お隣りをほめれば嫁の気に入らず
芋食って育てた子供に家出され
橿原市　岩井本蔭棒

天が鳴る地が鳴る除夜の百八つ
孤老にも訪う客があり嫁が君
サバよんだ時刻へサバをよんで来る
二世契るどころか今日をもて余し
八尾市　古川鶴声

気の長い話やなあと笑う母
孫連れて軍歌で辿るハイキング
近日のニュースから
四次防へ道に合わない物作り
答弁に辞典抱えた頼りなさ
尼崎市　高津徹也

舞い初めの娘は今年嫁く話
貧しくも家紋の羽織厳と着る
いい湯なり女将の自慢元湯とか
何事も忘れ湯煙る町で寝る三日
大田市　藤田軒太楼

齢かいな檀家総代がまわってき
喉までの叱言おさえて茶を命じ
心底はわかったお前はお前俺は俺
若さは若さ体験がものを言い
広島市　山田季賛

彼岸花旅の車窓にもえており
金で済む話がなかなかはかどらず
人間の使い捨てされたくないあせり
サングラス工事現場の陽がまとも
兵庫県　河原みのる

あえなくも栗の貞操破れたり
神は与え給う忘却のこころを
列島が皆票田にみえる秋

倉敷市　松下一梁水

片想いでしたと笑う齢になり
口笛が恋のサインとなる若さ
茶柱で話題を変えた娘の気転

西宮市　藤村〆女

夕やけにふる里はよしわらべ唄
伝統をまもる野良着に身を包む
本番で孫の度胸を見直され

小松市　馬場魚山

温泉の古さを語る芭蕉の句
建て替えてから池の坊派手に活け
小遣いの事を無職は尋ねられ

大阪市　木村水洞

都会人を慰めくれる仙娥滝
空模様気にせぬ下戸の紅葉狩
ケチつけてそれからほめる長屋族

奈良市　宮口笛生

無理効いて無理を重ねて四十代
いいときのないままいつか白髪じむ
目的の達成遠くもう五十

倉敷市　藤井春日

人生に定退と云う小休止
弁解をするから疑惑つきまとい
中一でもう白村の主義を説き

泉大津市　村上春巳

戦後まだ終らず南十字星
人間の良さに五尺の神だのみ
誰も来ぬ朝を小鹿と南円堂

大阪市　今西章雅

気の精だと言うた鈍感笑われる
飲むな飲め高血圧はゆれている
就職に運転免許優先し

加賀市　細呂木魯木

明治ッ子クリップが笑うことよりよる
神仏があるから凡人生さている
活字には信がおけない生まの声

竹原市　時広一路

思い出を四捨五入して顔が晴れ
ここまでは意地を通しただけのこと
予定には無い引き算で面喰い

呉市　槙田英詩

星屑の願いはせめて名が欲しく
初心忘れて自惚れの殻まとう

散髪へ明日行く髭は放っとかれ

今治市　小笠原有里

元旦の計は息子の嫁のこと
老醜をかくし無心の舞扇
反骨ともいわれ変人ともいわれ

大阪市　飛田好一

人生の重荷を酒で耐えている
襟元の汚れが目立つ目のやつれ
日本の心忘れている旗日

富田林市　板尾岳人

山男除夜に起され雪を踏む
乾杯へ手と手が凍る御来迎
白い息夜明けの山を温ためる

倉吉市　渡辺菩句

悪いのは女房それでも負けておく
診察へ情けない顔と声となり
この青年もポルノと金と自家用車

鳥取県　谷無閑

幸福は五十の息子の肩をもみ
面影を追えば計算又ちがい
牛売って米売るまでを喰いつなぎ

羽曳野市　大峠可動

泣きごとが宿ればみんな貝と化し
折れていてやれば喜ぶ知恵なのか

★

老いてなお職あり倖せとやいわん
ひたすらに愚凡の道を歩み来し
もう五人仲人したい夢があり
何年ぶりか老妻がほめてくれ

竜安寺にて

吾足るを知らず愚凡の夢多き

若本多久志

看護学校文化祭（一句）

看護婦の卵芝居も上手なり

北川春巣

すり切れた鞄教師の見栄のよう
色直しすむと新婦は活気付き
つぶやきをカメラに聞かせ旅ひとり
六十になっても易の本を読み

西尾栞

読初や句集旅人福寿草
シェリー酒に趣味の話をあたためん
夜長よし女房の趣味俺の趣味
夜長よし金にはならぬ趣味のこと
一文にもならぬ川柳と妻は言う

菊沢小松園

万灯ろう消えて迷いのもとの闇
金網を揺すぶったとて出られまい
世間体考え過ぎて恥が増え
ヤングパワー母校の門へ書きなぐり
女ですもの齢に関りない願い

川村好郎

老いもよし夕陽よければ明日は晴
女ひとり祇王寺をまだ去らず
疲れ寝へそれみなはれと妻
永旅のゆるむ心に霜光る
節越えて越えて竹の強さなり

近詠

須坂市　高峰柳児

身の上を底辺憶面なくさらし
男勝り悪女の片鱗も備え
かたくなに古老補聴器で負けていず
庶民下積みに日本列島論力み

大洲市　米沢暁明

三味の音へ和すせせらぎと櫓のしきり
レントゲン僕には嘘がつけません
生花展師匠の口添え鋏みぞえ
モニターのここいら少し当てずっぽ

今治市　月原宵明

地下足袋の泥は屋台で乾いてき
ひたむきに慕いつづけた黄水仙
バスを待つ位置反対に夏と冬

年頃の覗かれそうな部屋にいる

岐阜市　市川鱗魚

一こくな男で下駄も片べらせ
ホステスの嘘はくらしのかかる知恵
金の無い僕を大ようとも言われ
ぶぎっちょな俺に女難を笑う妻

東京都　池口呑歩

人生不可解　だけどやっぱり色と欲
人生不可解　理非曲直も得手勝手
人生不可解　筋を通せば四面楚歌
人生不可解　悪い奴ほどよく眠り

今治市　長野文庫

風邪と云う名で飲む会を欠席し
お竹輪の太さ話題になる団地
生真面目な性質で軍歌がかくし芸
子の嫁に知られたくない三味達者



新春のご挨拶

中島生々庵

明けましてお芽出度うございます。

お蔭さまで「川柳塔」も八回目の新年を迎えるわけであります。「川柳塔」内外から賜わりました、あたたかいご支援と、ご鞭撻によって今日のこの慶びがあるのであります。新春を迎えるに当りまして厚く御礼申上げる次第であります。

思い起してみますと、昭和四十年秋、呱々の声をあげて以来、「川柳塔」というかよわい未熟児を、何の経験もない、不器用な人間どもが集って、無我夢中に哺み育てて参りました。過ぎて終えば、当時の事が——昨夜の夢のようでもありますが、なかなかどう致しまして、直接衝に当たられた「川雑」の編集部の白柳、一三夫等を中心に、門下生有志が集って、深夜に及ぶ血の出るような協議が毎日続けられたあの当時の事が——焼きつくように脳裡に残って居ます。その中から梅里や、梅志や、白柳も故人となって終いました。

私は「川柳塔」創刊号の巻頭に「いそいで大きく育てようとか、自分のてがらにしようとか、そうしたあせりや、功名心を出してはいけない」と自分に言いきかせるためのご挨拶を書いた事を記憶して居ります。

あれから満七年。こんど迎えた新しい春には愈々小学校一年生にあがる歳になりました。親馬鹿と笑われるのは覚悟の上ですが、血筋は争われぬもので、目鼻だちも整った凛々しい顔にランドセルも似あった制服の姿を想像してみて下さい。目がしらがあつくなって来るではありませんか。新春を迎えた今日、こんな思いになんだか落ちつかぬ緊張が一

疲労回復・肩こり・神経痛に
アリナミンA
☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で
タケダ

しお胸をしめつけるのです。私は六歳で父をなくしたのですが、その私が初めて小学校にあがる朝、私の母が、瞼に一ぱい涙をたたえながら、私のうしろ姿を見送ったであろう光景を——勿論当時の私に記憶がある筈もないのですが——ふと頭に描いて見たのです。もう今年からは幼稚園の園児さんと違いますよ。小学校の一年生ですよ。こんなことを、私はいつの間にか、私の母の言葉振りになって、「川柳塔」にささやいているのでした。

ほんとうにそうです。これまでの幼稚園時代の甘い殻は脱ぎすてて、立派に一人歩きをするのです。出来ますとも。出来ますとも。しっかり自信をもって、踏みしめて歩きなさい。時に一寸躓く事もありましょう。時には思わぬ回り道をする事もありましょう。そんなことを一つ一つ気にやんでいては駄目ですよ。世の中の多くの人達が、お前を是非必要とするようなものになっておくれよ。誰かが私に言いきかせているのか。その言葉は私の母の声のようでもあるし、私自身の独語のようでもあるのです。

こんな風に正月というものは毎年毎年、倦きもせずに、倖せになるように、明るく暮せるようにと、一見愚かにさえみえる悲願を、くりかえすものです。ことしも新春のくりごとを、自分自身にいいきかせる言葉として、「川柳塔」の将来を瞼の裏に描きながら綴っているのです。

「心をあらたにして初心を忘れず」という言葉は言いふるされた言葉ではありますが、力強い真実味があふれてる言葉だと思います。同時に芭蕉が言ったように「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」という言葉も、私にとっては新春気分を張り切らせるよすがとなります。路郎先生が「何を求めての七十余年のご生涯」であったか。今年こそは真剣に考えて、少しでも「川柳塔」が成育してゆく上に反映さしてゆくべき歳ではないかと、しみじみ憶うのです。

どうぞ本年も相変りませず、「川柳塔」を暖かく見守ってやって下さい。そして小学校に上がってからも「川柳塔」がますます、いい子に成長してゆきますように、お導き下さることを偏にお願いして、新春のご挨拶といたします。

皆様のご多幸とご健康を心から祈念します。

麻生葭乃

一月元旦プランをたてる年齢でなし
ひとり居て孤独礼賛主義の日々
おさな馴染もソフトフォーカスとなりゆく
まだ呼吸をしてる私に照る日曇る日
西方浄土へ行く乗り替えはいつのこと



頌春・川柳塔社

同　一　事
同　同　一
同　同　同
同　一　部
一　一　部
参　常　理
　　任　理
　　事　事
　　会　部
　　句　編
　　集

川傍柳初篇研究

（百十四）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

675 二三日歯のぬけたるハ恥しい　嵐弓

清＝乳歯は五六才になると抜けてはえかわる。この乳歯が抜けて空気のもれる歯並びは子供心にも恥ずかしい。しかし、二三日たてば子供のことだから歯のことなど忘れてしもう。

藤井＝子供の生理的な脱歯をよく見て十七字にした。「鬼の歯ととっかへろ」といって、上歯は縁の下に、下歯は屋根に投げた子供時代を思い出した。古川柳中にもこういう句があってうれしい。

高須＝「二三日」と言ったところが「歯のぬけた子の恥しさ」を表現し得て絶妙。佳句である。

丸・岡田＝賛。佳句。

676 うら口をメ切る時分榊来る　一甫

清＝榊原式部大輔を詠んだ句かと思うが、不解。

藤井＝榊は山王祭のお祭りの先頭の榊のこと。家族総出でお迎えしなければならない。従って裏口を締切って後顧の憂えを絶たねばならぬ。そのグッドタイミングをうたった句。今とちがって祭典は、なかなか時間通りに施行されなかったろう。

高須＝山王祭の神輿の前駆として来る榊。何かと家中の片づけにかかり、ようやく裏口へ鍵をかける時分になって、やっと榊が来たという句で、このお祭りをいかに町民達が待ち望んでいたかが、句の裏からになっている。

丸・岡田＝諸説賛。

677 なに親をだましましやうと息子いゝ　一甫

清＝どら息子が、親をだまして吉原通い。「だましましょう」は友人にさそわれての返事であろう。だまされている親は母親の方。だます内容は行き先ともとれるし、金の工面ともとれる。

藤井＝何の落度か。金か、女のことか。そのことで親の不審顔に対しての息子の追求。それだけで色々に想像される。どうも道楽息子のニュアンスがあるのだが。

川端＝だまされるのは母親。

高須＝「なに親をだましましやう」は「何で私が親をだましましょう」（だますもんですか）というので、それを息子がいうのだから、息子が狐の皮をかぶって、シャアシャアと親の前で、見えすいたことをいっているという句で、父親対息子、母親対息子と設定は各自の思いのままでよいのではなかろうか。

丸＝高須説賛。

岡田＝「何で親をだましましょう」などと云って、又だましている。

678 嫁爪をゑんやらやっととがらかし　一甫

清＝花嫁の遊芸としての琴を、周囲の連中がむやみに聞きたがるが、嫁の方はなかなか承知しない。しかしついにことわりきれなくなって、琴爪をはめることになる。六七人にのぞまれて嫁はじめ

琴のあなたへ花嫁をひきすへる　第二33

藤井＝「ゑんやらやっと」で難工事を示し嫁の恥ずかしさを誇張しているだけの句。**高須**＝前出「琴を直して嫁を引っぱって来る（30）」や「嫁芸にかけては爪が長いなり（33）」などもある。「嫁の琴」の句でいささかウンザリである。**丸・岡田**＝諸説賛。

679 **かけ取の前で銭箱ぶちまける**　一甫

清＝大晦日の掛取の攻勢はすさまじいが、受けて立つ方も必死である。仮病を使ったり、雪隠や炬燵へ逃げかくれたり、さまざまな手段で防止する。しかしどんな手段を使うよりも、主題句のように銭箱をぶちまけるのが、最も賢明な方法であろう。なければ掛取りも退散するより方法がない。**藤井**＝すてばちの気持ちがよく出ている。有銭さらけ出して、たんかをきっている江戸っ子。だから江戸っ子は年中ピイピイして得意になっている。**高須**＝ぶちまけるが、少々大ゲサだが、捨て鉢の感じで「今日は首でもとって行く気」で来た掛取りの鋭気をくじいている情景がよく出ている。掛とりが帰った跡でふとい奴そして、その掛取りが、あきらめて帰った後で「太い奴」だと怒っている。どっちが太い奴かわからない。**丸・岡田**＝諸説賛。

680 **わるずいて是に御咄しなさりまし**

藤井＝わるずいては悪推量して、邪推しての意。誰かがなにを誰れに云っているのか私流に解してみると、なにかの噂を邪推して、これは一大事と、主人あるいは若旦那に膝つめ談判して、ここで「一切お咄し下さいまし、よきに取りはからいますから」という場面を「是に御咄しなさりまし」で感じとるのだが……、自信はない。**川端**＝「是」は家康の祖父清康が左手に是という字を握った夢を見、禅僧竜閑院に占わせたところ、是の文字は「日下の人」で左手は陽、右手は陰であるから、清康の子孫が天下を握るだろうと占ったという云い伝えがある。「是」に話をすることになるが、伝説からみると、禅僧竜閑院が、松平清康にすすめていると解されるのだが……**高須**＝川端説では「悪ずいて」が利かぬ。柳雨説は「内のことは、私よりこれが知っていますから、是（これ）がよく知っていますから、是（下女）に話して下さい」と奥様がツンとしているところ……と言っている。悪推量が利いていて、頂ける説である。**岡崎**＝高須説賛。「悪推量」に旦那と是との関係を匂わせていておもしろい。**丸・岡田**＝同右。

俳諧宗匠ここにあり

東野大八

正月は毎年エトにちなむことを書いてきたが、今年は牛。大して変りばえもしないことて、ラチもない、と考えたトタンにエトでアナふさぎしたとてせんなきこととホンゼンと悟った。

そこで世間の松の内というオーヨーさの逆手をとって、少々カビの生えた床の間の餅を切るつもりで、京、上方、江戸の風流のなかを泳ぎ回った、エセ宗匠の在り様をひっぱり出すことにした。このほど直木賞をもらった井上ひさしの「手鎖心中」は面白しだが、これはこれなりのオリジナル江戸風流であるわけで、私は私なりのつづめをつけて書いてみよう。川柳とは一体何からはい出し、何によって肉づけされ、魂をおびて二十一世紀の当節までさまよいつづけるのか、よってなすユエンをさぐることも花カルタくるより面白し、さてそのくり言の順序に俳諧の宗匠の在り様について。出たはまず古文也。

「いまどきの点者というをみれば、きのうまで馬は生類になりまする。牛は閻に二句嫌うかとたづね、はなひ草口から四枚も覚えぬ者が、菓子袋に押すよう成印判をこしらえ、軒号にびくりさせ、一句一銭の点取に読めぬ所は評書なしに付墨し、トビは俳諧やら鳥は連歌やら、何ひとつ分ることなし。この点者に成りて諸国に名をしらるる程の人はまず二十年をへて八百八品のさし合いをちゆうに覚え、見合文台に当座の了簡なり。これらが宗匠連、一座を見るに、たとえよき句をいたしても気に入らぬ顔つきして、おのれがよろしからざる句をいたせる時のためなり。つらつらおもうに点者愚かにして徳のなきゆえなり。作者の貧福にかまわぬさばきこそ、まことの宗匠なり」（西鶴〝織留〟文中より）

「むかしと今の俳諧まず心ざし裏なり。いにしへは連衆一会興行せんとおもえば、十日も前より一巡し、極まれる日は何かとてよく相つとめ、御影を仰ぎ香をたき、わが句の時はきつとかしらをさげはばかるよしをのべ、会のうち物語するもせず、あげ句読むとき膝たて直し礼儀ととのえ、あとにていささか酒強いて、帰る時は門前にてうやまうこと正し、翌日はハカマを着し宗匠のかたへ参りて昨日は御苦労かたじけなしと一包へぎにのせ出す。当時はまたさにあらず。点者のかたよりひたすら会をすすめ、やうやうに料理を出し、一巡よむまでもなく先盃をさし回し、わが句まえにてなければ大きなる声をあらげ嵐三右衛門は惜しいことをしました。中村七三はのばらぬかと、我れがちに言いあい、はては大酒になつて、懐紙がどこにあるやら、点者に芸をさすやら、されどあふぎはな紙はまぎれぬように取回し、帰りにはいとまごいせず。さて翌日は宗匠のかたから礼に参り、昨日は色々御馳走、ことに珍らしき貴句を承り恭く存じたてまつる、ときつく礼をのぶ。これむかしといまあちらこちら也。昔は短冊をたのみ絵の賛をのぞむ時は、宗匠のよき相口を以て、本金の色紙をつかわす。さて、点者も気をつくろい句をあらためて書くゆえに廿日余もしたためつかわす、一包へぎにのせて礼をつとむ。今は点者のかたよりさきに、短冊書いて進ぜようといえば、ぼろぼろの土のこぼる色紙をなげ出す。さらさら書いて送るもろくにみず、足つき塵籠にうちこんで煤はきのめいわくになりはつる」（轍士〝花見車〟より）

少々古文が長くなったが、西鶴は点者のモノの知らなさをわらい、轍士は作者が点者を敬わぬことを嘆いている。西鶴の文は元禄二年で、轍士が同十五年、この間十三年間に俳諧の流行がしようけつを極めたことに〝あべこべ〟が出てきて、点者の貫録の失墜が眼にみえて語られている。とにかく、ブームの中の点者なる今様の公認選者くらすが、どのよ

うに扱われていたかは眼にみえるようだ。

もっとも元禄五年の「永代貞徳記」の中で随流が「誹道に連歌の秘訣を伝えしは貞徳一人に限る。然るを誹弟器量の人には大儀の受代を課して許免し、誓紙の切紙にて伝誹せられしなり。当代誹士中に貞徳門葉ならではこの事知者なし」と言っている。つまり、門中器量の人のみ、師弟関係を結んだということを言っているが、問題は「大儀の受代」で、これの誓紙を入れたもの以外は、師の極意を伝承する資格はないとされていることだ。

林鴻が〝京羽二重〟で、貞門の秘伝を世間に洩らしたと随流は大いに憤慨し「大賊にあいたるごとし」と述べ、貞徳三年、西武三十七年合わせて四十年にわたる大儀の受代をうけた自分がバカバカしいとぼやいている。

一体、その誓紙とは何か。調べてみると、奉書を三枚つなぎ合わせた長さ五尺に余る紙面に、門下となる連中は署名し花押を据えて師匠に差し出す。「芭蕉翁正風体誹諧」のそれが「伝受秘書」というわけで、その長々とした紙面には、門下で師にもとる行為をなしたる場合の「制戒」が記されている。もしこれに違背すれば「和歌三神の御罰」を蒙るべしとある。蕉門に誓紙がとられたことがこれで明らかである。もっとも芭蕉がこういうことをしたわけでなく、寛延年間の日付による誓紙は、去来の門人と称する止嵐という俳諧師の手許から出てきている。

この人物の伝受の切紙が面白い。四通あってその俳諧秘伝の第一は「発句に切字無くてかなわず」とあり、第二には、不易と流行とが説かれ、正風と変風が説かれ、発句の風姿と風情と曲節が説かれている。第三は、「言葉を取る句」「類句」「撓句」「苦ミ句」「志句」の五品を述べている。第四は六体の「口訣」について説明がある。その中に「心狂」「詞狂」「皮肉骨」が出ている。

私はその蕉風秘伝の切紙の内容を何日もかかって読んでみたが、柳生の剣法秘伝書なみでさっぱり要領を得ず、さては口伝のための箇条書なりと判断せざるを得なかった。

ところで問題の止嵐なる俳人は、どう俳書をあさっても影だにみえず、結局徹止の「花見事」の古文に戻ってしまった。

「近世桃青門人世にはびこり、諸国に頭陀往行して名山古跡を見、また一筋をすすめてありしに、四、五日もとどめて大回しの切字はいかに、第三の字どまりはいかようにする、恋の句一句にて捨てるはいかになど伝受をかたらせ、昼は会に引出し、夜は鳥のなくまでものかかせなどして、べったりとくたびらかし、帰るときは集料句代ばかりさし出してこなたより便状以ってなどとまぎらかして置也。からしり草鞋茶酒は何を以てととのうるやら。右の句料をつかうの他なし。さるによりて出さぬ集もあるよし也。味なき味噌をふるまい、ノミハエにいぢらせ、あまつさえ跡にては下手くそのなんのとそしりののしるなり、こののち行脚の人々も方角をきつくろいて通るべし」

むかし中国にも「山人」を装う詩客が横行し、詩ごころの巷人を困惑させた山人禍同様に、芭蕉以後の往時には、やくざの向うを張る俳諧のエセ先生がさかんに江戸、上方をハイカイしたらしいことがこれでわかる。

止嵐の伝受が、右の手合いであったかどうか、切字や不易、流行の語などと思い合わせると一概にエセ俳人とは片づけられまい。去来や許六や支考などにおよんでも、放浪の渡世に「伝受」「秘伝」書を金にかえたこともおのずと考えられてくる。そうなるとこの種の元祖の芭蕉は一体どうだったということにもなる。本文はじめの江戸俳諧に慶紀逸が出、柄井川柳が胚胎してくるのも道理である。次号はそれをおっかけたい。



新年吟について

正本水客

新年吟というと打てば響くように、私の頭にひらめく句が三句ある。一つは

凡聖一如　元旦のこころ知る

勿論、路郎先生の句である。後の二つは

元旦だ一二の三で跳び起きむ　豆秋

元旦のどこかで笑う声がする　梅志

豆秋さんの句は、私には詠めそうにない軽味の境地であり、梅志さんの句は将に私の詠みたい情景そのものである。

元旦――暮る　半文銭

これも私の頭にこびりついている句である。これが川柳であるかどうかは別として、少なくとも短詩であるとは言えると思う。

さて新年吟とは何だろうと改めて考えてみると、

㈠新年に関することを前もって詠んだ句

㈡新年に詠んだ句

ということになる。㈠は（A）年賀状の句（B）新年号の雑誌などに発表する句に別けられる。㈡は新年に際して生まれた句で、いわゆる新年吟の本命である。

◇年賀状の句

賀状の束を炬燵の上に載せて一枚一枚見ていくのは正月の醍醐味である。私は以前に句のない賀状は受けつけないと半ば冗談で、柳友に宣言したことがあった。賀状の句というものは、年末の忙しいときに日時にせきたてられてデッチあげることが多いから心に残るのは少ない。私自身のものも句帳に書き留めていないのが多い、自信の句がないからである。しかし、山陰の方から大阪へ移ってきた知人から、水客さんの賀状は毎年アルバムに貼ってあるので、近くへ来ても忘れずに下さいねと言われたことがある。また、喪中につき年賀欠礼の通知に添え書して新年の句だけは是非拝見したいと思いますと、これは川柳をやっていない人からの便りである。こんなことを思うと良い句が出来ないなどと怠けてはいられないなと思う。先の〃凡聖一如　元旦のこころ知る〃も路郎先生からの年賀状である。

実際の句について四十七年一月から順に遡って見てみよう。

禱ることもないので楽しいお元旦　生々庵

健康状態も仕事の方も順調である、家族の者もそれぞれの生活を楽しんでいる。神様には黙って頭を下げるだけでいい。人として、これ以上の正月はない。

追いたてられ乍らことしも初春となり　小石

としての迎春の気持に素直に共感できる。

元日や我　泰山の如く座す　栞

左手に盃がある限り男は動こうとしない、正月である。



生かされて心にしみる初日の出　芳子

夫の、子供達の、そして皆んなの心が句主の命を大病から甦らせた。生かされての上五も心にしみるの中七も動かせない言葉である。

座るとこそろそろきまりかけて初春　春巣

長年の宿舎生活に別れを告げて建てられた新居も、そろそろ我が家らしい落着きが出てきた。わが家の春である。

一すじのみちゆるぎ無く年明ける　小松園

私にも〃辿りきてひと筋の道暗からず〃があった。この年は万博の年である。

あいさつはおおむに似たり新春の街　白柳

句主の温顔が眼に浮かぶ和やかな風景、四十四年は酉年である。

どこらまで行けるのか僕の道　久米雄

句主には珍らしい十四字詩が爽やか。

四十二の厄　直球に威力なし　笛生

慎重にカーブでゆきましょう。

柏手を打てば地の声　神の声　静水

年頭の句として素晴らしく迫力のある句だ。

◇新年号の雑誌などに発表する句

雑誌などの正月号を飾る必要上、一二カ月も前に作る訳だから過去の経験や思い出を基にした発想になる、新鮮味が薄いことは否み得ないが、すぐれた句も少なくない。一月号（四十七年～二十三年）の誌上からひろってみる。

初日の出　何はなくとも深呼吸　水車

庶民にふさわしい初日である。

年頭に疎遠を詫びてそれっきり　伊三郎

誰でもが経験し誰でもが言いたい事柄。

正月に出した碁盤のうすい塵　文月

松の内も過ぎて、ようやく普段の生活にかえってくる。

年始客だけでのんでる応接間　方大

すぐれた漫画である。正月は温泉地などへ疎開する人の気持も分ろうというものである。

正月も二十日過ぎると寒いだけ　一傘

二十日過ぎともなれば正月気分も抜け、小遣いも乏しくなってくる。

元旦の騒音　旗の釘をうち　香林

騒音の二字が正月の静けさを引きたてる。

酔えばすぐ寝る癖　正月淋しませ　柳児

その人の生活なども偲ばれて、淋しの語も気にならない。

お正月呑ませるわけのないのも来　喜由

昭和三十三年の初春である。こんな正月気分もだんだん無くなってきた。

舞初めに母も坐ったままで舞い　路郎

私の頭の上に、今この色紙が掛かっている。まことに長閑な気分である。

◇新年に詠んだ句

おなじ干支や御題を題材としても、賀状の句と違って気分も落ちつき、無理に目出度がる必要がないので句に面白味が出てくる。

鉛色に空だけぬれば冬の山　古方

淡彩なタッチで力強い。

絵に書いたねずみは餅にすわらされ　竹荘

幼い子の絵を見るようで微笑がうかぶ。

なべものを我が家の幸はことたれり　栞

足ることを知る幸せ。

齢すでに猪突邁進とは行かず　小松園

亥の年、そろりそろりと参ろう。

花びらの反抗　露をよせつけず　水客

美しく優しいが、その心は動かし得ない。

羊歳さっそくゲストに引き出され　白渓子

何気なく干支を句にとりいれている。

行き届く世話より自由が欲しい小鳥　清子

ペットとは悲しきものよ。

虎の尾を踏むスリルにあこがれる　柳宏子

それを若者の特権であるかのように。

犬は今日お供の出来ぬ服と知り　玲人

聞分けのいい犬の眼は淋しそうである。

◇次は年頭に当って詠まれた新年吟としての本命である。47年の川柳塔から川柳雑誌の戦後復刊号までの三月号発表の句を主体としてチェックした七十句から以下紙数の許すかぎり採り上げてみよう。

元日を静かに酔うてあらたまり　鬼焼

静かにと、あらたまりがよく正月気分を出し

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二一―四
夜間 (762) 四四〇八

ている。

正月やないかと巡査からまれる　美房

屠蘇気分満点。

年始客送り碁敵むかえられ　代仕男

さあ、これからが本当の正月です。

一年の計を二月で練り直し　久米雄

三月、四月で春風に散って了う。

手さぐりの最初　若水汲みながら　正朗

初さぐりは若水、なんとなく微笑も湧く。

養殖のいかだ動かず初春の海　多久志

小春のような海の色が眼に映って、いかにも長閑である。

うららかに元朝の霜とけはじめ　千翁

霜のとけるのさえ麗かと感じられる、元朝はよきかな。

お年玉集金に来る寝正月　杜月

おとなは静、子供は動。

追い羽根が比叡の雪を引き寄せる

追羽根のふとあげた視線と比叡の山の白と、清々しい。

寝正月きめ込んでても金が要り　静馬

起きてみつ寝てみつ金の出る日かな。

一月一日一月一日だけのこと　古方

哲人作者の眼が細い。

淀川の水滔々とお元日　薫風

何の変りもなく来たり去る水にも元日を感じるのが人間の嬉しさである。

元旦の白衣の勤務まぶしく見　清子

句主の闘病記、まぶしくが鮮烈である。

正月のフィナーレになる戎さん　形水

十日戎が過ぎると正月呆けも元に戻る。

新年の駅にする気か水を撒く　好郎

掃除をして水をまくのは常時のことであるのだが、大晦日ともなれば何か引きしまった気がする。

恩師から賀状の返事老いたまう　春巣

何気ない言葉に真情があふれていていい。

しめ縄は貧を忘れる飾りもの　法泉子

古句のような味が捨てがたい。

元日の日誌に嘘はなかりけり　柳志

一月一日晴れでは嘘の書きようもなし。

お正月遠慮勝なる椎立ち　鉄舟

悲みのなかに何となき可笑し味を感じる。

福寿草　父子兄弟に似たりけり　薫風

葭乃奥さまの〝福寿草松にしたがいそろかしこ〟は夫の陰に安住した妻の像を画いて美しいが、これは固まり身を寄せて咲く福寿草を親子兄弟と観じた眼のすばらしさ。

元旦を死者1となる人もあり　求芽

うごかせないげんじつのきびしさ。

あまったら母出すとこある賀状　一瓢

出しゃばらないが家庭の中心にいる母親の姿が好もしい。

年賀状戻ったまんま縁が切れ　保美

誰もが経験している事柄だが、案外句にしている人が少ない。

寝正月済んだら風邪で寝てござる　花代子

何となく有りそうなことで微笑を誘われる。

元旦は停電せぬを恩に着せ　豆秋

昭和二十八年、戦後が華やかな時代である。では最後は、私の好きな句で締めくくろう。

数の子のみんな育てばすごかろう　葭乃

ATLAS

アトラス

高級洋菓子・レストラン

本店　洋菓子部TEL (33) 9974
レストランTEL (21) 2334

一月元旦

（告白の巻）

麻生荳乃

大晦日はみんながバタバタしているので、私も門の戸を磨いたり、応接の掃除をしたり自分の部屋をかたづけたり、二階の窓ガラスを拭いたりした。少々疲れて来たので、除夜の鐘の鳴る頃から、盃で冷や酒を何杯か飲んで寝て終った。朝眼が覚めたら、からだのシンが抜け出たようで、湯気の中を歩いているようだった。脈も少し早いので体温を計ってみたら三十七度あまりであった。お医者さんは三カ日は休診なので、自重して寝床へもぐり込んだ。これまでの私はどんなに疲れても、草臥れても、コップ酒一杯飲めば元気百倍、仕事は二倍も三倍も平気で出来たのだった。「川柳雑誌」の仕事をしていた頃は毎日の睡眠時間は四時間程しかなかったが、決して昼日中に横になるような事はなかった。昼は広告の仕事で会社商店の宣伝部へ足を運んだ。一年間通うて漸う一カ年継続の契約をして貰った会社もあった。私のような口不調法な人間が広告取りの仕事をするのは木によって魚を求めるのも同然であった。機を見ることも敏でない私が何年かこの仕事を続けて来たのは路郎の交際範囲が広かったせいもあったが、如何にも素人くさい私の応対振りが、却って部長さん、課長さん達の同情をひくことにもなったのだと今も思っている。

不馴れな仕事からビルの事務所へ帰っても用事は山のようにあった。時には自宅へ仕事を持って帰ることもあった。一晩のうちに千枚あまりの案内の住所をしたためたことも覚えている。こんな時にひっかける冷酒の一、二杯は鈍りかかっている私のエネルギーに活を入れる刺戟剤でもあったのだ。

昭和四十八年二月二十四日で満八十才になる今となっては、疲れを癒すための酒はもはや私のからだに何の奇蹟も現わさぬようになった。いよいよ酒と別れる日が到来した。一杯は一杯を誘う酒の魅力は忘れよう。酒は百薬の長などと上戸におもねる甘言は返上しようと思っている。

然し私は元旦に祝う朱塗の盃に未練がある。猪口の九谷焼にも愛着がある。酒にまつわるこのイメージは私の肉体が土にかえる日まで綿綿として続くであろう。

（昭和四十七年一月記）

水煙抄

菊沢小松園選

億兆へソロバン塾の軽い音　大阪市　阪上十止庵
シューベルトいつかコーヒがさめている
嘘と知りつつ義務の一票投ぜんか
幸せはダイヤのいらぬ妻の指
生きてゆく音　音愛隣地区夜明け　島根県　榊原秀子
時雨くる音をひとりできく炬燵
海へゆく涙が探がす理性です
これがわがゆく道だったUターン
ブスブスとくすぶる悔へ弓を引く
素直さを盆栽きつい痛めよう　大阪市　小谷葉子

新春

愛ひとつ一つ73年の衣替え

赤穂温泉　一句

乙姫になりたや岬に一人立ち
トラブルの罠に反省のまつ毛濡れ
静かなる闘志　恍惚の旅に立ち
春夏秋冬人恋うるか嵐山　長崎県　光武弦太朗
白頭を掻けば短かし左顧右眄
猫が物食わぬわが家の一大事
シャム猫の恋路に邪魔な血統書
吹けば飛ぶこの一票に骨があり　竹原市　三宅不朽
古代人ふっと出そうな帝釈峡
遊歩道枯葉の知って散るのなり
水の音みずの流れに佇つも旅
最後まで残って友の酔うてくれ　岩国市　村井酉合
底のそこつたう好意に支えられ
かかわりはないが男の無責任
「しっかりね」わたしの声がとどくかな
開けるのよ母さんいなくなってから　和歌山市　樫村ふみよ

そんな目でみないでさんま高いのよ
雑布にならぬを明治捨てかねる

退院のよろこびころげて来る受話機
片すみで見てる此の世がこわくなり

尼崎市　中谷利美

断われる余地を残してプロポーズ
二つ三つ年を損した下手な義歯

禁酒まだ知らぬ飲み屋の年賀状
安楽死させてやる気の蠅叩き

竹原市　脇本政己

ジャングルで昔の心を持ちつづけ
ゆすらねば動かぬ金魚の肥満体

断ち切ったつもりでいたのに蟻の列
いつわりのある夜はすぎる酒となり

松山市　谷のぶお

春夏秋冬菊はやっぱり秋のもの
孫抱いて老のいのちに灯をともし

逆らわぬ女房にいつか負けていた
高い靴はいてたおっぱい着けていた

大阪市　堀口欣一

日本人エスカレーターを駈け上り
事故現場丁度紅葉が美しい

ドブさらいした手に勲五等瑞宝章
転んでも只では起きぬ親譲り

氷見市　関美子

癇症な首へまきつく銀ぎつね
銀ねづの小紋が似合う日蔭の身

正直が二三人いて座がもてず
しめ飾りつけてレッカー車に引かれ

今治市　真山国彦

診察へ女房の方がよく答え
松茸を食べぬどころか見ずに済み

棟梁の祝詞はかなを付けて読み
お上手と褒めるは只で書かせる気

尼崎市　小林文月

昨秋県知事表彰（民生委員）を受く（二句）
あっさりと片付けられし以下同文

二十七年以下同文で片付けられ
定年の後は賀状の数が減り

岡山県　嘉数千代香

落葉掌に猿よ詩情が湧いてるか
ニニンガ四の夫で出世に遠くおり

無人駅よお休みなさい終列車

東大阪市　坂東若芽

父昇天（八五才）
もう父母の居ない故郷の曼珠沙華

ともかくもほうたい巻けば治る傷
一日がせかせかと暮れて　秋

備前市　武内雅堂

四畳半の鏡演技と知りながら

京都には京都の素足ばかりなり
逃げて来た素足を父の眼が叱り

橿原市　西本保夫

平社員の宿命笑顔ですぐ答え
平社員の椅子あたたまるヒマが無し
息子にもまだ平社員かと言われ

島根県　堀江芳子

嫁ぐ娘を惜しむ寝酒の畑に立ち
循環器あすの天気を知りつくし
あけすけに言えばやっぱり腹を立て

倉敷市　井上濤笑子

煮えきらぬ話秒針ひだるそう
裏庭にみな転ろがった冬の風
髭剃った人と日曜のバスで逢い

新潟県　市川一峯

角の字にあやかる子の名急にふえ
老婆にも女らしさがまだ残り
金の要る話になると皆だまり

東京都　宮崎美津子

ふみどころなく待っている主婦の留守
お陽さんがまっ先みつけた初おむつ
ポケットにあの日の切符衣更え

今治市　渡辺南奉

静かにも冬が心に迫ってる
幸せを確かめるのに金がいる
今日暮れたとて明日の幸保証せず

守口市　岸本豊平次

笑わない客に漫才汗をかき
見舞いよりベッドが笑う快復期
お隣りの留守も引き受け寝ておれず

竹原市　生信笑子

まがり角貴方の声が聞こえそう
降りやまぬ雨よ今夜も一人
やればできる貴方がそばにいるかぎり

大阪市　柳原静香

ぜいたくの原点母と娘でちがい
人生の坂道病夫と手をつなぎ
ワッペンがつくもの買うて孫を待ち

島根県　槻谷一葉

消えたくて心に鍵をかけて見る
肩巾に男の匂い二十才なる
Uターン出来ぬ余生を温める

河内長野市　井上喜酔

反骨へ意地でのばした不精ひげ
太鼓判どうにもならぬ不器用さ
頼りないくせに芯だけちゃんと持ち

島根県　栂みどり

七色に変りあじさい便り待つ
さりげなく尽くす心の片思い
苦しみも思い出となった暮し向き

愛媛県　小笠原仲美

そうかそうかと結局聞いてくれただけ
悲しみの弾がわたしにだけ当り
満員車人間十把一からげ

米子市　増田竹馬

みな巣立ち振出しに戻る老二人
ああ子供振出しに戻る老二人
はやる気へ待ったがかかる五十肩

大阪市　平井露芳

横井さん結婚
お茶だけで済まず子供も作る肚
天満宮にて
七・五・三みな秀才になるつもり
大阪城
原形のままで巨石は城守る

鳥取市　大塚豊生

嫁となる娘が来て囲む茶の間の灯
玄関の菊に疲れを迎えられ
亡き夫の持ち味を継ぐ子に育ち

島根県　東原福子

風紋をえがき抵抗なき砂丘
供花にする程はコスモス庭に咲き
吹き抜ける風にコスモス冬を知る

島根県　谷岡芳枝

生き抜いてひととき華やぐ秋の山
若者の見捨てた里の山炎える
飲めぬ身に酔うた言葉が突き刺さり

愛媛県　小山悠泉

停年へ続くレールが見当らず
故郷はよし石槌の雪景色
心の錆落そう初日へ手を合わせ

桜井市　北嶋忠明

前向きの姿勢北風受けて起ち
釘を打つ音もリズムのある大工
トウチャンを見送る顔のごはん粒

今治市　大本バット

読んだとてどうにもならぬ議会記事
薯作り小さな薯から食べ始め
数産んで置けばどれかが見て呉れよう

今治市　伊藤一郎

春頌 '73

中島生々庵　若本多久志
北川春巣　菊沢小松園
西尾栞　川村好郎

遺児がもう遺影の父の齢を越し
ラーメンとハムで留守番頼まれる
炬燵出す出さぬで揉める老夫婦
今治市　古野伶人

飲まぬからいろんな酒が溜まって来
頑固だと向うで決めて俺を待つ
あそこへも此処へも菊をやりたがり
守口市　樋口一峯

自惚れが飛べぬ翼にしてしまい
浸水の二度目見舞の客も無く
分け合うて暮らした頃の有難さ
堺市　栗本藤持

辞書がいる孫の手紙に手間かかり
恋文を読み直して銀婚式
公約も見ず投票の義務果たし
八尾市　高杉千歩

息子の客をもてなす昼の薄化粧
カクテルの本も揃えた三が日
東西屋と隣り合せたラッシュアワー
大阪市　河原林比呂路

口下手の一言いたいとこをつき
根性を通せば頑固と言う他人
愛憎のきずな切れたりつなげたり
大阪市　小谷清女

慾深いため息喉にひっかかり
吐き出して見れば何処も秋の風
新宮市　川上富子

ベビー服ちいさくちいさく出来上がり
フンフンとただうなずいている人の恋
本当はついでの方に用があり
守口市　野呂杜月

合理化の言葉老け行く身にささり
孵卵器のような毛布で夢を見る
猿群に生きるきびしい掟見る
新宮市　三木千宜

願かける時に消えてた流れ星
一応はリズムに乗っている音痴
思い出の中に飛んでる赤トンボ
和歌山県　ふきあげ虎城

このご恩忘れませんと遠ざかり
身に憶えあるから娘に問い詰める
倖せの見本男の背にかくれ
和歌山市　垂井千寿子

地図持って地図にない道行く二人
母の袂を持っているという安堵
青春が軍歌にかくれていた私
新宮市　熊野渓水

吹き消したはずのマッチが燃えていた
泣きに来た海に昔の色がない

結婚も離婚も同じ判を押し
和歌山市　秋月宏方

お若いといって老人よろこばせ
遺産零だから兄弟仲がよい
大阪市　藤田頂留子

いいタッチ大空キャンバス夕映えて
ターミナル今日もマイクが票ねだる
新潟県　高野不二

拝観料出して賽銭は上げず
エスカレータあー人世はすれ違い
和歌山市　増田めぐみ

一生懸命働いているのを見てる旅
余命まだ残して落葉散りいそぐ
新宮市　城丹鶴

新婚が熊野を走っている平和
公認に洩れた無所属吠えつづけ
今治市　蔦本昌道

美しき花の扉の冷めたさよ
明日は征く愛知ることは宥されず
大阪市　松本市郎

パチンコも腰にこたえて遠ざかり
流れ星生者必滅説いて消え
宿毛市　山本窓花

島根県　岩田三和

男なら一度はおどれ傘おどり
手をつなぎあなたまかせの丸木橋
出雲市　板垣草丘

初あられ飲む口実になって跳ね
緑之助句碑地点
どの辺で詠んたか本人連れて来る
鳥取県　林露杖

思い出の中にあるから美しい
かきたててみても燃えない焼棒杭
東大阪市　藤田飛鳥

もう何も聞くまい星がきれいすぎ
離草でありたい素晴らしき夜明け
岡山県　武元柳子

何もかも話すつもりの夜を待つ
秋の蚊の借金責めるよう唸り
鳥取市　有田鹿の子

人生の孤独を砂丘抱いてくれ
形見分け袖から明治の札が出る
東大阪市　落合思月

さて金となると親類よりつかず
よく稼ぐ女で一と言多すぎる
寝屋川市　福富隆子

恐る恐る答えば優しい時も有り
朝夕に死への恐れを覚え出し

氷見市　有磯涙月

詑びたとてもとへ戻らぬ身体です
週休二日疲れ月曜へ持越され

寝屋川市　江口度

妻以外の女性のミニは気にかかり
美女にさえ閉まったバスの戸は無常

高知県　岡田星雨

焦燥の眼を野ら犬に盗まれる
札束へ老夫が一人逃げおくれ

松原市　守屋万竿

伸びる芽を曲げて情報渦をまく
滔々と語るに落ちる弁をぶち

七尾市　松高秀峰

肉親のよさは病んでからわかり
福祉法目玉にしてる選挙戦

藤井寺市　古結百水

ポルノ館出て街の目に射すくめられ
生むことと育てることを別とする

寝屋川市　井上武松

ルソン島の戦友と再会して
餓死をした友の話にひとしずく
流し合う背中の傷へ思い出し

大和郡山市　森田カズエ

黒板の誤字が気になる式次第
稀少価値ナース五十の白衣着る

弘前市　小山内貞男

時くれば頑固も折れる栗のいが
明日知れぬ今日の倖せかみしめる

泉佐野市　大工静子

どんぐりの背並べ共によく似合い
何もかも運のよい人やなと言われ

茨木市　日高文子

疲れてる顔せめてもの紅をひき
案の定あっさりゆうてほり出され

須賀川市　平栗金太郎

幸せは地毛で結われる高島田
古々米は貧乏人と豚が食え

今治市　今井松花

小糠雨失対時間まで勤め
甲斐性者ばかり田んぼへ建て並べ

今治市　原田輝親

マッサージ感じるとこへ指が伸び
誰が得したでも無いに後家で死に

守口市　池川伸子

うなずいてわかったように講演会
町会いも掘りにて
こっちよりとなりの株が気に掛かり

羽咋市　三宅ろ亭

名前だけざっと一瞥賀状束
選挙への懐疑もあれど票売らず

竹原市　古江雅鳳

倖せの恋虹となりゆめとなり
限界を越えて愛の火が燃える
大洲市　堀内暁風
百年後子孫のためにする植樹
初対面弱気にさせた古い傷
島根県　安達小茶坊
一票が頬冠りして裏へ抜け
竹さおの先に坊やの蟬がいる
大阪市　新川貞
そこはかと無言で戻り百か日
老のかげりか胃も前立も腸も切り
姫路市　大原葉香
官僚の鎧ちらつく酒宴なり
霊域に居る間だけの善人で
仙台市　川村映輝
仁術の医者が新聞記事になり
守銭奴に掴まり紙幣日の目見ず
鳥取市　藤本佳女
見えぬからテレビへじっと耳を立て
子の音痴やっぱり親子似てうれし
鳥取市　藤本恵子
逢えばすぐおしゃれの話食う話
キャンパスへ秋の紅葉をほしいまま
鳥取市　藤本鎮也

高架からなる程街はカーラッシュ
栄転と言う名で本社の平になり
鳥取市　藤本和宏
バスがゆれ肩抱くチャンス見逃さず
ラブレター僕のポッケでまだ眠り
鳥取県　佐々木静水
耐えているこぶしを悔の手でつつみ
胎動を聞かせ母へと化身する
大阪市　内藤ますえ
夜おそく己が一人の物を煮る
目を閉じて無念無想と迄いかず
大阪市　松岡進
年寄と若夫婦と居る不運
菊人形花がしぼべば寒むかろう
大阪市　今井隼人
亡き妻に留守をたのんで鍵をかけ
孤独をばまぎらす父の軍歌なり
大阪市　岡本まさひろ
やる気だがテレビ体操は寝て見とき
播いた種刈らねばならぬ不養生
鳥取県　福田陽山
留守番の全責任を犬がおい
岡山県　河原孝女
寄り添うて座りたいのに差し向い
羽曳野市　麻野幽立

青森県　波　ただお
うっ憤の捨てどこもなくじっと見る空

高槻市　山田スミ子
山は秋ススキは冬をよんでいる

大阪市　明朗川柳会
小手先が器用に生れ手内職

大阪市　須浦つね
菊を着て源平の盛衰見せて呉れ

大阪市　木村濁水
ライバルに負けて帰りは別々に

大阪市　吉野志津
運動会孫に似ている子等ばかり

大阪市　花田繁子
闘病に勝って福祉も受ける幸

大阪市　鈴木生仏
共稼ぎ金は出来たが子はできず

大阪市　岡部シゲ
天辺の熟柿は烏にやろかしら

大阪市　村島秀村
色づいたあの柿よその柿ながら

・正　月・

・不二田一三夫・

あの頃、親父の女狂いと、母が他人の借金の保証人となったそいつに逃げられ、あれやこれやの悪循環で乞食同様の生活に追いこまれていた。ぼくの小学四年生の正月だった。

正月の晴れ着もなく〝寝正月〟はこども心に覚悟していたが、母が暮れにぼくを数日間寝床にほりこみ、着ている紺がすりを脱がせて洗い、それを徹夜で縫いあげてくれた。キモノも年中一枚よりなかったので、ひとえからあわせ、綿入れへと季節が変わるたびに一枚三役だった。

元日の朝、とにかく垢（あか）のついていないキモノが枕元においてあった。母は大変だったと思った。着ているものを脱がせ、出来上がるまで寝かせておかなければならなかったし、三日間で、ほどいて洗って、張って縫うのだから、母の目は赤くはれあがっていた。

それほど母を苦しめて着せてもらった晴れ着？を、わずか外へ出て十分間たらずでドロドロに雪と泥でよごしてしまったのである。

悪童数人がぼくを竹馬遊びに誘いにきた。今から考えると大池橋付近に住んでいたのだが、そのころの猪飼野は見わたすかぎり田んぼで、葭乃先生がおられる生駒山ろくまで一望手にとるようだった。その頃の大阪はよく雪が降って、その元日の朝も五センチほど積もっていた。

そこに田んぼがあって、その中央に二五センチほどのあぜ道がある。白い巻き紙をのばしたようにのびていた。

「このあぜ道を向う側へわたろうか」というヤツがいた。五、六十メートルはある。しかしドイツも竹馬にのっているだけに、みな二の足をふんだことである。

「よし、オレについてこい」と、節が四段の高い竹馬でぼくが先頭をきった。

「あかん、あかん」と、うしろで声がしただけで、だれもついてこなかったし、ぼくもやわらかいあぜ道に竹の先きをとられ、進退きわまっていたが、Uターンどころか、つっこんだ片方の竹馬を抜くのに必死だった。しかも四段の節だから足元がグラつき、アッというまに雪と泥の田んぼへ横倒しになってしまった。痛いほどの冷たさよりも母の苦心が水のアワとシャレてもおられなかった。

また、洗って張って縫ってもらうまで床の中へ逆戻りである。正月がくると、このことが痛いほど思いだされるのである。

★

▼西日本新聞「暮らしの百面相」から——

元旦のどこかで笑う声がする　後藤梅志

前略—正月ともなれば、前日とは打って変わって、人のこころも表情もなごやかにな

一分間の柳論

橘高薫風

久方ぶりのご来駕うれしく存じました。むさくるしい部屋で何のおあいそもなくおゆるし下さいませ。カラー写真もありがとう存じました。亜鈍さんのお姿はいきいきとして、今にも話しかけられそうでとてもなつかしく思いました。自由にご自分の感情を吐露していられる亜鈍さんの近詠にてらし合わせて見ていると、遠くはなれていても、昔のようにお互に勝手なおしゃべりをしているようです。

右は麻生葭乃先生のお便りの一節である。昭和四十四年の桜の花の頃、尾道を訪ね、盲亜鈍の手をひいて路郎先生の墓所を探しあぐね、探し当てた時のことで、彼は、一塊の墓碑を撫でながら、真実落涙して止めどなかった。人生一期一会、哀別離苦、酔生夢死の情感が交々去来したのだが、人間から、おのずからなる人間味のにじみ出た時、高邁な川柳が生まれるのではなかろうか。

よき細工はやや鈍き刀を用いるこそよけれ、の名言はここにもあてはまるようである。

る。そんな元日のふんい気を、大づかみにつかんでうたいきったのがこの句。九州の作家の新春吟を並べてみると『元日の顔を踏切り並ばせる』（古沢蘇雨子）『よき日本願う初墨すりながら』（安武仙涙）そして『いささかの期待を待って年が明け』（金子竹川）。

生活のうちへ数えぬ三カ日　岸本水府

『一年の垢つけたまま寝正月』（辛島静府）というのもあるが、まずは結構なお正月、を思わせる作品がほとんど。『日本の美をとり戻す三カ日』（木村幸月）。その三日間もきのうですんで、きょう四日、官庁や会社は仕事始めである。

一日は子の正月になってやり　川上三太郎

★

餅のない正月もした子がはたち　松江梅里

この句の餅のない正月、とはおそらく、戦争末期から終戦後まで数年間の正月のことをいうのだろう。食糧事情が極度に悪かったあのころ。あの苦しい時代を親子ともども乗り切って、わが子もついに満二十歳になった、ことに対する父親の感無量の気持ちがこの句にこめられている。あと二作略。

（小泉戸牟）

川柳塔社常任理事会

七二年のさよなら理事会は十二月四日に開かれた。さすがに師走とあって欠席者が多かったが、主幹ご夫妻のおもてなしで日本酒が卓上を賑わす。

二年後の十周年記念に出す同人句集のスタイルをどのようにするか、など思いは七百ページ近くになるであろう同人句集のあれこれに話がとぶ。

句会の選者級で月に一回ぐらいはディスカッションをやってはどうか、こんな提案も出され、議題のない理事会も楽しいね（柳志）という声も出るほど肩のこらない会合だった。一月中旬すぎには例年のように新春理事会がある。

出席―薫風・庸佑・多久志・生々庵・柳志・文秋・一三夫諸氏。

★

永田暁風著、句集「白磁の壺」送料共五百円が、〒662兵庫県西宮市安井町五の四、永田暁風氏から発行になった。序文に柴田午朗氏の紹介がある。

雅号ぶっちゃけばなし (106)

ろぼく　ほそろぎ



細呂木　魯木

魯迅の名にあやかった訳でもありませんが、若い頃堺市にいた時、新聞に投句するため、本名―七字―が余り長いので、また面白半分に姓だけを漢字で当てている内に、呂木の替りに魯木が出てきた。そしてこれを〝ろぼく〟と読み雅号にと思い三十余年使っています。柳歴ばかり永くて句の方はさっぱり。〝昭和川柳〟時代がなつかしく忘れられない。奉天に住み、天津に転勤になった頃、川柳から短歌に移ったりしたが、やはり川柳に愛着を持ち、川柳一途に戻ったが、最近は専ら鑑賞ばかりで、作句は御無沙汰勝ち、心気一転作句に精進したいと思っています。

雑貨商（五十六歳）

川柳の『笑い』

北川春巣

川柳にユーモアが少なくなったとよくいわれる。ユーモアは川柳の一要素であったのだが、近頃の川柳にはこのユーモアが少ないことは事実である。

「笑い」とユーモアとは同じものではないが、「笑い」も川柳には欠かせないもののように思われていたことも確かである。この「笑い」も近頃の川柳には少なくなってきている。「笑い」を大言海で調べると「笑う」とは「顔の散（わら）くる意」と出ている。「笑う」とは顔のある表情をいうのである。大言海の「笑い」の項には、おかしさの笑い、わらいぐさにする笑い、わっと笑う、ドッと笑う、ほほえみの笑い、歯をむき出しての笑い、あざけりの笑い、など多くの「笑い」があり、それぞれの漢字がある。恐らく現在の印刷屋にはそんな漢字は揃っていないに違いない。

「笑い」は西洋人によって研究され、私は以前パニョルの説によって「笑い」を書いたことがある。しかし日本には外人に分からない、パニョルの説では説明のできない「笑い」があるようである。

最近「日本人の笑い」について、二冊の本が発刊され、私はそれを読んだ。一は「笑いの構造」（梅原猛著）であり、他は「日本人の笑い・笑いの構造」（山本明・松本　勤・中村敬治共著）である。これらを参考にして、今回は書いてみよう。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、横浜に上陸して、日本人の微笑に極めて強い印象を受けたようで「日本人の微笑」という一篇を書いている。ハーンはある外国人の婦人から聞いた話として、ある日、その婦人の雇っていた日本の女性が「何か楽しいことでもあったように、にこにこしながらその婦人のそばへやって来て、夫が死んだから葬式に行きたい。」と申し出たということである。しかもこの女性は帰って来てから遺骨のはいった壺を見せて「私の夫です」といいながら笑ったという。ハーンには理解のできない笑いであった。

指のない尼を笑えば笑うのみ　（古句）

柳樽初篇にある名句だが、この尼僧の笑いが外人にはちょっと分らないかも知れない。われわれ日本人には分るのだが……。

「指のない尼」というのは、かって傾城だった時、客に誠意を見せるために小指を切り落した尼僧である。その後浮世の有為転変にあって、傾城から尼僧になったのであろう。人がこの尼僧を笑ったのは、小指のないことに対する侮蔑の笑いであろう。それに対して尼さんはただ笑ったのみである。「笑い」の表情には前述の大言海の笑い方があるが、心理的には、好意の笑い、快感の笑い、成就の笑い、優越の笑い、卑下の笑い、空虚の笑い、侮蔑の笑い、などさまざまな精神的内容を伴なっている。また日本人の笑いは、闘争を避けて人から好かれるための防衛の役割を果している場合が多い、ともいわれている。

有名なダ・ヴインチの名画「モナリザの微笑」は、永遠の謎の微笑だといわれているが一昨年路郎賞を受賞した生信笑子さんの句

モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる

において、作者が笑うたのはどんな心理的規制による笑いなのか、私には分らない。作者に尋ねてみなければ本当の所は分るまいが、いわゆる「日本人の微笑」なのかも知れぬ。

貧乏も余りの果ては笑い合い　雉子郎

雉子郎こと吉川英治氏の有名な句である。一読ほほえましい、ユーモラスな句であるが、「笑い合った」のは何故なのかは、少し深く分析せねば分らない。吉川氏が貧乏のどん底にいた一時期があったことは、伝説のように聞いているが、「貧乏も余りひどいので」思わずも「笑い合う」というのである。恐らく卑下しての笑いであるまい。卑下にしては句が明る

過ぎる。「笑った」がために、句が明るくなったのであろうか。前述の笑いの種類からいえば「空虚の笑い」とでもいえるのではなかろうか。あるいは夫人と向い合って、貧乏を忘れんがための防衛のための笑いであろうか。

同じ「笑い合う」句にも

二世までも嫌と女の笑い合い　若菜

というのがある。句主の若菜さんは、ご主人と共に悲劇的な最期を遂げられた闇秀作家であるが、子供もなくて淋しかったに違いない。ご主人とは、二世までも夫婦であることはお断りする。と内心思われていたのかも知れない。その話し相手の女友達も、思わず相槌を打って、二人か三人か分らぬが笑い合ったものであろう。片や空虚の笑い、片や好意の笑い、とでもいえようか。

あっさりとふられたことを笑い合い　路郎

これは明かに、ふられたことに対する卑下の笑いであり、相手は好意の笑いである。

足の裏似てると親子で笑い合い　弘生

という句もある。ちょっとした発見で、親子とも快感を感じた笑いであろう。

以下、少しばかり句の中に「笑い」ということばのある川柳を紹介して、その笑いの心理を解剖してみよう。句に笑いが少ないと前に述べたが、「笑う」ということばがはいっている句も少ない。そして句の中では「笑って」いても、その句が必ずしもユーモラスとはいえない。このことは

笑ってるのは高座の二人だけ　一三夫

という句にみられるように、当事者だけがおかしくて笑っても、聞く人、読む人には何らユーモアを感じさせない句も多いのである。漫才の二人が高座で先きに笑ったのでは、見物客は笑えないことが多い。滑稽な洒落や動作を、ニコリともせずにする所に却って見物を笑わせるコツがあるように思う。川柳も同じである。

この人も褒めれば笑う顔を持ち　流路

褒められて笑うのは、優越感の笑いである。

にんにくの効目ひとりでほくそ笑み　久米雄

どんな効目かはいっていないが、大体は想像がつく。事が思う壺にはまった成功のほくそ笑みである。

掏られたを苦笑ですます地位にいる　路郎

苦笑して貸してもらえぬ予感する　多久志

「苦笑」という笑いもある。苦笑とは、自分の弱さを自己確認する笑いにほかならない。

アルミニウムかアハハと戎さん笑い　路郎

これはいわゆる「豪傑笑い」である。豪傑は強くて、自分の強さや能力を他に誇示している人物である。後藤又兵衛や塙団右衛門のような人である。句の場合は戎さんである。豪傑笑いは、英雄のように勝利者としての笑いではない。豪傑として自己確認の手段としての笑いである。

カンラカンラと昔は笑ろたそな　一三夫

これも豪傑の笑いである。英雄の笑いは擬音化すればカラカラの方が適当なように思う。

句の中に「笑う」ということばのはいった句をほかにも少々並べてみたいと思ったが、もうスペースがなくなった。「笑う」ということばが句の中にある場合、どんな「笑い」かを考察してみることも興味あることと思う。是非おすすめしたい。

一分間の柳論。

川村好郎

先日某柳誌に此頃の川柳流行語を並べ「ピエロ抱く烏に止る赤い鳩」を投句したら入選した。こんな句を投句する私も馬鹿だが尤もらしい解説付きで抜いた選者もどうかと思う。作ったのではない敢えて書き並べたというが、何等思想も感覚もない。それを抜かねば選眼不明無能と思われるという妙な見栄からではなかろうか。

こんなひどい句はないがこれに類似したものが新しい川柳として私の手元に送られてくる。頭の悪い私は読んでいるうちに気が狂いそうになる。誰にでもわかる句は昨日の川柳だそうだ。

句意を聞いても作家自身も説明出来ない、ある時の瞬間的ひらめきであって感覚的主観が白い烏、黒い鳩に表現されるので、これが明日の川柳であるそうな。

川柳の原点から出発し積み重ねられてかく展開されてゆくなら諒解されようが、初心者の付け焼刃的なこんな句に接する時、私は寒気を催す。こんな句が明日の川柳でなければならないなら私は川柳界から脱退したい。



川柳ゆーもあ特集

―同人作品―

（到着順）

大阪市　有信新之助

バスだけがいそいそ帰る旅疲れ
末席へオールドミスが酌ぎにくる

大阪市　山川阿茶

日本語で喧嘩も出来る親日家
皮フ科医の皮フ病皮フ科で診て貰い

大阪市　西出一栄

金貯めて金に稼がす皮算用
足跡をきっちり踏んだ浮気沙汰

倉敷市　本田恵二朗

キオツケの姿勢で仮縫突き刺され
犬が鼠をとった猫が見ていた

岩国市　弘津柳慶

言い負かしたポリスへ本署に引っ張れ
兄嫁へ気兼な朝をそっと起き

高槻市　福田丁路

親馬鹿を子馬鹿になって慰める
入院と聞いて見舞えば犬だった

橿原市　岩井本蔭棒

夏ばてを見舞えば飲みに行って留守
日照権夏は黙っている木蔭

広島市　山田季賛

工事終れば浮き草のごとみんな散り
工事場は西へ西へと活気見せ

倉敷市　藤井春日

グッバイと云えば青い瞳サヨーナラ
色男何んとかやらで三十路越え

富田林市　浅川八郎

眼をむきばなし仁王様しんどかろ
招いてる仏の慈眼はほんとかな

出雲市　原独仙

「カッコイイ」だけのハンターと犬も識り
お臍から産れるのよを不思議がり

大阪市　河井庸佑

お隣もそれではうちも幼稚園
寄り道がもう先様にばれており

大阪市　本多柳志

くん酒山門に入るを許してよく稼ぎ
そろ盤を貸せと社長も十二月

守口市　羽原静歩

金語楼笑いの渦へ消えて行き
河内弁東北弁にものを聞き

大阪市　室谷徹舟



もう一度鍵確める几帳面
夜ふかしへ金も体もよう続き
高槻市　若柳潮花

顔ぐっと出して取らせるつけまつ毛
倉敷市　野田素身郎

逆立ちへ小銭が派手な音をたて
有り金を幹事トイレで確かめる
高知市　川竹松風

家でせぬ笑顔バーの隅で見せ
招待を受けて来たのに犬が吠え
倉敷市　谷井扇水

内ゲバに見られたくない薄化粧
精算はしてある判だけつきに来い
大阪市　河股緑水

ひさしぶり会えば借金思い出し
この顔や忘れまへんと礼言われ
岡山県　出原敬一

町のダニ私服が車へ積んで去に
あほらし票欲し浮気の後始末
倉敷市　小幡里風

片方のマツゲがとれた泣き笑い
双方の嘘がもつれている家裁
大阪市　川口弘生

一仕事するように赤ちゃん欠伸する
留守番に隣りの犬を頼りにし
兵庫県　河原みのる

ざまみろというのも混る火事見舞
税務署をママ七〇キロで押し
倉敷市　竹内翁童

お元日父は小言を云えぬ酒
借金と利子の息づくマイホーム
呉市　槇田英詩

幾久しゅう願った妻にしてやられ
これ以上詫びても無駄とふてくされ
島根県　小砂白汀

方向が逆だと電話駄々をこね
イカサマの手つきで蟷螂振りおろし
島根県　堀江正朗

見えぬのに色で歯ブラシ決めてくれ
親切が仇になる日もまた夫婦
藤井寺市　西いわを

もてたこと妻へ話して笑われた
左手は爪も切れないもどかしさ
姫路市　梅谿庵不酔

漫画には持って来いじゃと俺の顔
お多福も俺には一番よい女房
守口市　村田瓢太

言いたいこと言うと大臣首が飛び
俺達の若いころはがまたぞろ出
大阪市　正本水客



栗の虫　紙に包んで妻すてる
久振り喪服の肩が叩かれず
八尾市　飯田悦郎
金魚売り来たのがわかる河内弁
空気に注意大阪ガスのコマーシャル
京都市　松川杜的
三十年の汗哀れ十坪の家に消え
ピアノの音さえローンの音で鳴り
鳥取県　森田布堂
代読の弔辞どこかで聞いたよう
鼻風邪をひいて薄着の酔が醒め
呉　市　林野甦光
しっぽだけ掴んでるよと負けおしみ
魚屋の籠が支線で巾を取り
大阪市　天正千梢
計算器ふやし事務の首を切り
マークにほれて中身確かめず
倉敷市　能登原白水
ビリ走りあとふり向いている園児
初めてにして番犬に尾をふられ
伊丹市　小川静観堂
角栄さん三枝子さんおんなじようにパンダ賞め
人格欠損姥捨山を退院す
加賀市　細呂木魯木
筆初め毎年遺書を書いて見る

死亡欄俺と同じ年が増え
岡山県　浜田久米雄
グッドバイスチュワデスはさようなら
平凡な句であるが訪米旅行中に出て来た句である。
和歌山市　垂井葵水
落ちそうな首労組に支えられ
バッジ未だ裏むけたまま二日酔
神戸市　仲　どんたく
万有引力の法則我が家へ辿り着き
ほころびる顔のスナップ孫抱いて
倉敷市　水粉千翁
損得の得に芸あり低姿勢
よくもてる夫わたしの徳にする
鳥取県　清水一保
公約が笑って手招く二十日間
選挙中はみなバラ色の生活を夢見る。
岡山県　浜野奇童
赤チンをぬれば走れる足になり
父の意地母子で笑うのも茶の間
岡山県　大森娯句楽
種明しして笑わせて真面目顔
勝越しの星転げ込む不戦勝
新宮市　川上大輪
読経する和尚に音痴ない不思議
ウィンクへ反応睨み返される



おそるおそる出したオカラがお気に召し
差向いOKさす気と断る気

宝塚市　傍島静馬

惚れられてるつもり香水変えて見る
気を付けて気を付けてけつまずき

大阪市　児島与呂志

異性との友情妻の目に不潔
社交族と知ってるバーの計算書

竹原市　森井菁居

税務署でも知らぬ仏の随し金
解散の声と同時に行くトイレ

大阪市　西川誓二

まだ脈があると正直ほめられる
やんわりと来る要求に弱いパパ

倉吉市　奥谷弘朗

通信簿手加減の無い二が並び
逆光で撮られ美人に出来上り

倉敷市　小野克枝

空席じゃないよとすわる週刊誌
釣書にオーバーかじりかけの趣味

岡山市　川端柳子

うっかりしてる間にちゃっかりしてやられ

松江市　中川晃男

まだ生きていたかと仏会いにくる
電話口女は長い舌を出し

神戸市　小浜牧人

譲られた席微苦笑で礼を云う
広言を聞きたくはない某候補

大阪市　本庄金三

良い客へコーヒーが届く問屋街
七人の敵には強いが妻に負け

大阪市　飛田好一

舌打ちはされたが金は借りられず
招かれてジャンバー背広にUターン

島根県　大森孝華

結いたての心にそまぬ八ツあたり
サンダルの片っぽ波に持ってかれ

大阪市　大坂形水

餅を焼く匂いに二階降りて来る
ほろ酔いの音痴を三味がもてあます

東大阪市　竹中綾女

再就職子が保証人の印をつき
目の毒と思えばミニの膝小僧

東大阪市　竹中肖二

遠慮してた客が本気で飲みはじめ

大阪市　中川滋雀



いじわるな鏡に皺が見えすぎる
借るときは推し戴いていた両手
和歌山市　野村太茂津

整型の目鼻へ脚が泣いている
子のあたま貶せば親を見て嘲笑う
大阪市　福井野迷路

勝ち馬は今の騒ぎが腑に落ちず
世渡りの一つ酔いつぶれた顔
大阪市　金井文秋

嫌な仕事は齢を云うて逃げ
救われぬ女ばかりで座がはずみ
大阪市　宮尾あいき

一枚の舌で結構嘘も云い
錠剤ばかりくれてお医者らしくなし
大阪市　小出智子

二十年さき想いつつ髪を梳く
忘れずに薬飲む身で春を待つ
大阪市　河野君子

寒波来て浮かれ出た芽にある迷い
土用干し女の見栄を窓へ寄せ
大阪市　不二田一三夫

皇后さまも女　ハンドバッグ提げ
寄席囃子ここでも食うか食われるか

頌春

お蔭様で「みかん」も一年目を迎えました。
今後ともよろしく御指導、御交誼の程をお願い致します。

川柳しんぐう吟社

〒647 新宮市玉ノ井町六一三二の二
電話 0735(2)7676
大矢十郎
川上大輪

川柳たましま社

川柳塔同人グループ

川端柳子　小幡里風　本田八笑人　水粉翁　小谷枝水　松下梁水　井三林坊　臼井

同人吟
秀句鑑賞
——前月号から——
川村好郎

面倒なことになった靴ベラを置く
腕時計はずせば枷の音がする
有信　新之助

現在の状態、感じを詠む句は多いが、この二句とも過去から現在にいたる経過を句にして、小さいドラマを形成している。この作家めきめき腕を上げてこられた。日頃の真面目な作句態度と熱意によるものと思う。その中からこんな佳句が生れてきたのであろう。

おんな坂風の指図で木の葉降る
香川　酔々

内容より表現の巧さにより魅かれた句である。詩情も溢れているし、よくもうまく作ったものだと感心する。この作家俳句の下地はあるが、作句力の盛んなことに舌を巻く、多作往々にして駄作になり易いことに注意せねばならぬが珠玉もその多作の中から掘り出せるものである。

御近所が何を指折る岩田帯
大矢　十郎

何のけれん気もなくスラリと詠んでいるが御近所も効いているし、何を指折るとはハッキリ云わぬところがよい。しゃちこばった句が多い今日。こんなフランと思わず笑いが出る句に接すると心温る思いがする。

近眼乱視色盲遠視両眼が開いてても
神谷　凡九郎

肉眼の近視乱視等々を云っているのではない。肉眼は正視であって心の眼が近視色盲乱視の人が多い世の中であろう。という自分も正しく判断しわかっているつもりでも色盲遠視かも知れない。肉眼の病気も治さねばならないが心眼の反省を怠ってはならないという句意を堅くならずに詠んでいる。

路郎賞眠れる筈のない夜汽車
堀江　正朗

おめでとう。実感の句としてよくわかります。うれしさが目に見えるようです。

毎年路郎賞川柳塔賞が発表されるがその表彰された栄誉の作家の其の後句が余り香しくなく、中には消えてゆく人が多いのを残念に思う。優勝した力士が次の場所の成績が悪いのとよく似ている。慢心だろうか、堅くなるのだろうか。路郎賞を頂いた人の句は読者は常に注目して読むであろう。正朗氏は謙虚に求めてゆく作家であるから、或は老婆心かも知れないが、これを機会に益々精進して欲しい。

どの写真も後列ばかりの妻だった
小川　静観堂

愛妻を亡くされた作家が残された写真帖をなつかしく見て感慨無量思わずその心境を句にされたのであろう。内助の功という月並みな言葉を使わずにその意味を事実を通して詠んでいるところが手柄である。

夫の愛へ心預けて病む日なり
河野　君子

病気をすればその数倍心も病気するものである。夫の愛を受けながら療養していられる君子さんは倖せである。病床にあればとかく暗い句になりやすいのに、悩みの中に倖せを味えることは嬉しいことである。心を患ういないこの作家のご快癒を祈りたい。

三十年悔の積木を積んでなお
吉岡　通児

勤続三十三年の表彰を受けられた作家の実感句として悔の積木とへり下った反省があり、最後の「なお」がこれからの意気を表わしていられ、心強く感じさせている。うれしさを平凡に作るのがこの場合常套である。それを脱しているところがよい。

本年もよろしく
ご指導くださいませ

近作柳樽

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

向うばかり見える目鏡でけつまずき

嘉数千代香

遠方が見えぬから買うた目鏡ではあるが掛けて見ると遠方は見えるが足許がよく見えない。けつまずきはけつまずく動作も含めて失敗の意もあるとすれば目鏡を掛けなくても遠方ばかり気にしていると足許が見えず失敗する人間諷刺の意にもとれる。

宝くじ夢消す夕刊待ちわびる

宮崎美津子

どうせ当ることはないであろうと心にきめてはいるもののひょっとするとの淡い希望も持ち合わせている。そして発表の夕刊を待つ庶民の気持がいじらしい。

心にもない音をたて戸が閉まり

岸本豊平次

心にもない音であるから静かな音の反対であろう。別に腹が立っていたわけでもないのに大きな音を立てて戸を閉めた自分の心に恥じらいと反省を覚えるのである。

墓参りいつか私も来るところ

大塚豊生

墓参りをした人々の何割かはこのような気持を持って墓石に水をかけているに違いない。生者必滅の法則は昔々から行なわれて来たしまたこれからも続けられて行く。墓参りのひと時にこの法則が胸をしめつけるのである。深刻という言葉で表現されるべき人生の一瞬である。

立寄ったわけを帰ったあとで知り

安達小茶坊

ある日ある人が立寄ってくれた。が別にこれという話もせずに帰ってしまった。あとで思い当るのがその人の来たわけで口に出せずそのまま去ったのは余程言い出しにくかったに相違あるまい。人と人との無言のつながりがわかるのである。

四点セット結納金を軽く越え

原田輝親

この頃の嫁入り道具の美事さおびただしさはよく耳にするのであるが箪笥は言うに及ばず洗濯機テレビから妊娠と育児の本、救急薬までのご持参である。嫁にやる娘を持った親の溜息は同情されるべきだ。

握手した分もチップの中に入れ

古野伶人

握手して来たホステスの手の温味。がまだ手の平に残っている。少々チップをはずんでしまったが握手してくれたのをその人の温か味ととれば惜しむ気持はさらにない。これでホステスの方もやって行けるのである。

音立てて燃えて崩れてしまいたし

林露杖

女心のどこかの奥に潜んでいるであろうと思われる欲望であろう。愛される者の本心はすべてをぶっつけて燃え上らせてしまいたい。その大胆な表現には読む人に恐れ入りましたと思わせる辛辣(らつ)さが漂っている。

あたたかい目を意識して恋進む

生信笑子

このあたたかい目は恋人同士の目でなくて二人を取り巻く近親者らのあたたかい目ととりたい。二人の恋仲を察知している人々はこの恋が実るようにはげましといたわりの目をもって見ている。この環境のなかで恋が成就しない筈はあるまい。

大阪文化祭川柳大会

谷垣史好

第二十四回大阪文化祭川柳大会が秋晴れの十一月十九日（日）、中之島の中央公会堂で



行なわれた。大正七年に竣工した、この歴史的建物にはエレベーターがなく、会場にあてられた三階の小集会室へは、古色蒼然とした鉄の階段をトコトコ昇らなければならない。その距離が近代的ビルの五階分はあろうか、お年寄りならずとも息の切れることであった。

大阪の川柳大会は昭和二十四年、市の主催で始まり、現在のような府市共催という形になったのは三十八年秋からということだ。最近いささか惰性的になったという批判に応えて、ことしは、ハガキによる応募をやめ、出句は出席者に限ることとし、兼題を各五題ずつにふやすという新機軸を打ち出したが、そのせいか、出席者は百三十名をこえ、小さな会場は補助椅子を出すという盛会になった。

もっとも、これは去年に比較してふえたというだけで、小松園氏が開会の辞で云われたごとく、山陰の小都市の大会でも二百名をオーバーするというのに、大大阪の年一回の大会がこんな程度では、とても喜んでおられないというべきかもしれない。だが、早朝から（朝寝坊の僕は遅刻したが）大会の世話に当った、わが川柳塔社幹事一同にとっては、この盛況はやはり嬉しいことである。

定刻よりやや遅れ十二時四十五分、菊田いさむ氏の司会で開幕。いつも閉会の辞専門の菊沢小松園氏が開会の辞、大阪市教育委員会の夏原俊之氏の挨拶のあと、俳人榎本冬一郎氏が「現代川柳と俳句の接近」のテーマをひっさげて登壇。川柳人にとって今日、もっとも関心の深い問題を、俳句の側からどう解明されるか、多くの人が期待を持っていたのだが、残念ながら、この期待は裏切られてしまった。

持ち時間の大半を、俳諧の歴史的説明に費されて、それにもまして、古川柳で記憶に残っているのが「居候三杯目には……」の句、現代の川柳としては新聞川柳と、「せんば」しか読んでいないといわれる氏の川柳認識に対して、失望とともに腹立たしさを感じたのは僕だけではあるまい。

高名な俳人にして、この程度とするなら、まして世間一般が川柳に対して古い先入観や偏見から抜けきれないでいるのは、考えてみれば当然なのかもしれない。〝川柳の社会化〟も道遠しである。

ただ、この講演が予定時間をオーバーし、一部の人が、早く終れといわんばかりに話の途中で拍手したのは、まことに非礼きわまる態度であった。川柳人の一人として全く恥ずかしい。

披講のトップは川村好郎先生。大会の選者は、いずれも在阪各柳社えりぬきだけに、それぞれ個性あふれる披講ぶりであったが、僕のとくに印象に残ったのは時事川柳。柳界の中で、どちらかと云えば軽く見られがちなこのジャンルに真剣に取組んでおられる姿には、改めて感銘されるものがあった。

隣室の大集会室からオーケストラの練習がつつ抜けに聞えてきて、ムードをこわすこと

おびただしい。ベートーベンの「第五」も、こうなれば公害である。マイクのボリュームを上げて披講がつづく。脇とりは与呂志以下鬼遊、酔々、天笑の若手諸氏。各題佳句三句に選者賞、秀句一句には川柳賞が府教育委員会参事・有本淳一氏から授与される。

最後の兼題「舌」の選者、西尾栞氏が登壇する頃には、もう秋の陽は傾いて、部屋の真中まで西日が射しこんでいた。清人氏と鬼遊氏が秀句に輝き、有終の美を飾る。

閉会の辞は本多柳志氏。「文化祭は川柳オリンピック、年一回、柳社相い寄って、三百年の伝統に、新しい油を注ぎ、薪をくべ、川柳の聖火を一段と高く燃え上がらせよう」と、お得意の持論を強調して、しめくくる。閉会、午後四時十分。隣りのベートーベンは、まだ演奏をつづけていた。

★各題の秀句は、前号に新之助氏から提出されている。（カットは会場の中央公会堂。フォト新之助）

大会選者の割り当て

水府番傘、路郎川雑の健在だったころは、大会が近づくと異様なまでに緊張したものである。たとえば水府先生が講演して、路郎先生が兼題の選者だけであったら路郎門下はおさまらなかった。これが逆の場合には水府門下の人たちもだまってはいなかったであろう。これは単なる勢力争いだけでなく、その年の当番柳社としての〝責任〟がそのようにいきり立たせたのだと思う。くわしく書くスペースがないから誤解されるかもしれないが、その当時からも隔年当番柳社は番傘と川柳塔であった。したがって選者も両社から二名、他の柳社からは一名だった。

それが第二四回大会から一柳社二選者となった。兼・席十題だから簡単に各社から二名となったらしいが、もし今年もそういうことになれば、当番柳社いがいの柳社は気がねするのではないだろうか。

本年は六百同人を抱える番傘さんが当番だが、それと合流する柳社が同数の選者を送るということは、どうだろうか。

十一万票で落選、四千票で当選という選挙と同じようにとられては困るが、大会選者の割り当てには主催者側もじっくり考えてほしいものである。

（不二田一三夫）

創立15周年記念行事を終えて
ますます意気軒昂前進を誓う
清新な編集・確実な発行
月刊 川柳平安
あなたの伴侶として乞ご購読
一カ月一二〇円・九カ月千円
〒604 京都市中京区姉小路通柳馬場西入
平安川柳社
振替 京都 七六五 番

柳友各位のご賛同を感謝し、国立公園・日御碕へのお越しを心からお待ち申しあげます。

除幕式・記念祝賀句会
昭和48年5月13日（日）

尼緑之助句碑建立委員会

委員長 原 独仙（〒693 出雲市塩冶町五〇〇）

〔委員〕
野村 岬月　馬庭 亮蔵　板垣 草丘　中川 晃男
原 章峰　馬庭 春軒　久家 代仕男　吉岡 遁児
山本 朱紅園　山 富持田　勉 藤井明朗
竹内 李朋　藤原 河南　木村 三雷波　堀江 正朗
坂本 昇雲　松原 正治　金村 青湖　勝部 湖楽
竹原 雲平　森山 健太郎　村松 酔歩　藤田 軒太楼
江田 八起亭　王 紫　岡崎 祥月　弘津 柳慶

初荷

天正千梢選

手拍子で持ち上げられている初荷　千翁
信号に初荷ばかりが並んじゃい　菩句
よそ様が出すから内も出す初荷　春日
三カ日初荷のように孫が来る　扇水
御隠居は初荷拝んで送り出し　松花
そろばんに合わぬ初荷で景気つけ　利美
どの店も初荷初荷の問屋街　思月
書き初めを兼ねて初荷の太い文字　竹馬
初春の巷の風を切る初荷　肖二
形だけの初荷へ今年の夢を乗せ　肖二
初荷と言う鯛のうろこもよく光り　鎮也
威勢よく大阪弁で来た初荷佳女
未亡人初荷の福を引き当てる和宏
新しい鋏で初荷のテープ切る恵子
威勢よく初荷が届き活気づき綾女
商魂を初荷に寄せる小企業昌道
初荷です酒屋は威勢よく届け隆子
幸先の良い唄声で初荷積み金太郎
景気よう初荷へ廻す事に決め古方
御祝儀相場で受取っている初荷古方
あきんどの儲けはじめと言う初荷一郎
縁起よく初荷を受けて開店し国彦
宣伝も兼ねて初荷が派手に着き輝親
ありがたい初荷やまほど着けてくれ　木魚
中国の初荷の顔でパンダ来る　どんたく
美やまし向いの初荷蔵冠り　杜月
初荷いま儲けなさいの顔で着き　里風
魚市場鯛から初荷のせりをかけ　章雅
当直は初荷を出して飲み直し　輝親
小商い初荷が店をせまくする　悠泉
運転手だけは飲まずに出る初荷　伶人
借金に喘えいだ初荷とは見えず　弘朗
先代の事も話題に初荷着く　カズエ
免許証もう叱られている初荷　本蔭棒
田舎駅初荷二三個下ろされる　松花
初荷の手前ひとこと手控かえる　軸

国旗

吉岡美房選

日本人国旗愛すること忘れ　国彦
ジャングルの孤独国旗にはげまされ　翁童
タラップの日の丸泣きそうなもまじり　古方
正面に国旗会場出来上り　可住
元旦の日の丸新しい風に舞う　秋女
今昔の流れを国旗知っている　軒太楼
外人も日の丸を持つ初参賀　扇水
祝日が増えて国旗は忘れがち　英子
さて今日は何の日だった国旗立つ　英詩
国旗だけ出して平和な寝正月　素身郎
今日旗日ところどころに立つ国旗　祥月
旗取りに日の丸取った子が威張り　扇水
日の丸を愛しつづけて古稀近く　秋女
団地ずらり国旗の数は二三本　松花
戦死した子の思い出がある国旗　佳女
国旗背に来賓祝辞まだつづき　英詩
国旗掲揚君カ代が少し早すぎる　葵水
元旦へ折り目のついた国旗出る　本蔭棒
万国旗焼いて運動会がすみ　奇童
戦後まだ終らず日の丸出さぬ家　利美
ゼッケンへちぎれるほどに振る国旗　梁水
祝日の国旗不思議な目で見られ　重人
日の丸の折り目もゆれる新家庭　千翁
日の丸を思想の外で振る男　千翁
祝日の国旗へ腰をのばす父　千翁
元旦の国旗のしみに悔ひとつ　里風
北方に国旗見られぬままに冬　魚山
日の丸はやっぱりいいな万国旗　利美

謹賀新年
昭和四十八年元旦
〒542 大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内
関西奇術教室
校長 村田瓢太

吟題

外国で仰げば国旗ジンとさせ　奇童
万国旗孫日の丸を見つけたり　好一
日の丸を立てて園児の砂の塔　里風
いがみ合う国も仲よく万国旗　貞男

佳

敗戦の責を国旗が背負わされ　伶人
家毎に国旗掲げる過疎の村　藤持
国旗是非目標持たぬ民となる　凡九郎
登山家の国旗を立てる場所は山　大輪
月面へ立てた国旗がはためかず　白汀

人

一日を虫干しに似た日章旗　葵水

地

優勝の国旗わたしの目もうるむ　静泉

天

国旗まばら日本の心を淋しがり　奇童

軸

政治家が振るから国旗汚れそう

新調

課題

福島鉄児選

新調の靴踏まれまい踏まれまい　暁明
仮縫へみたてた彼女も従いてくる　軒太楼
新調をテレ臭さそうに着る月賦　不酔
初の子を待つ新調の品ばかり　魚山
新調で出れば生憎雨にあい　暁風
新調の靴ピカピカと陽を弾き　七面山
新調をもう少し待つ伸び盛り　本蔭棒
角ばったまま新調をうれしがり　古方
新調やいうてもほんとにしてくれず　同
新調の服が反身に歩かせる　杜月
新調を揃え養子の部屋にする　潮花
新調へ親娘の意見くい違い　英子
新調の服が泣いてる二日酔　どんたく
新調を着て倖せのポーズとる　扇水
無理をしたらしいダブルがよく似合い　弘朗
新調の服もラッシュに押し込まれ　木魚
新調の背広寄り道したくなり　伶人
新調で出て水溜り気をつかい　松花
新調は洋服箱へ又もどし　国彦
新調の背広が二十歳を男にし　秀峰
新調をしてへそくりを見破られ　一郎
新調を写す鏡が小さすぎ　バット
新調にしたら歩き方まで違い　可住
子供だけサラで飾ったお正月　重人
新調を揃え嫁がす親の見栄　代仕男
新調の服ママの背で眠りこけ　英詩
母さんの着物仕立てて嬉しい日　奇童
新調のおべべ嬉しい七五三　秋女
肥満体採寸までも手こずらせ　智司
新調の和服は妻を若く見せ　祥月
新調の意識の中の身だしなみ　昌道
新調をしたが前のが捨て切れず　豊平次
新調の三面鏡は拭き清め　肖二

佳

新調の晴着今日から大人です　春日
新調をつまんで女同士妬き　梁水
仮縫のときはあっていた新調　翁童
新調が泣いて戻ったぬかる道　秋女
新調へ女はすぐに値ぶみする　昌道

人

襞取る喜び女だけが知る　綾女

地

新調をさせて女は着たがらず　利美

天

新調へお疲れさんという折目　千翁

軸

新婚の服へ最後のプレスする

初歩教室

――題「根」――

本田恵二朗

今月は、当教室に若いメンバー五人を迎えてうれしく思っている。この新メンバーは揃って中学三年生である。当教室の最年少者ということになるが、その前途は一番長いということにもなる。揃って岡山県産であることもご紹介しておく。素直に伸びろと祈る。以下五人の句と対話することにする。

大根を抜くに抜けれず気張り顔　淳川
（大根を抜く力こぶみくびられ）

腰おろし尻に根がはえ知らん顔　同
（尻に根をはやしてけろり白ばくれ）

根性の根をおろそうと持久走　誕留偉
（根性を五体に植えよう持久走）

冗談を根にもたれて困りはて　同
（なにげない冗談誤解の根をおろし）

根も葉もないことを言われて恥をかく　同
（根も葉もない噂に恥をかかされる）

葉を落し地に根を張って冬を待つ　和寿
（土深く深く根を張り冬を待つ）

（裸木の根強く冬に耐える貌）

先生の知識を吸いとる根をおろし　同
（師の知識をたっぷり吸おう根を張ろう）

岩肌の小さな草の大きな根　幸平
（草の根の執念岩にしがみつき）

（網の目のように草の根岩を這う）

根にもってうらんだあの気はきのうまで　同
（根に持ったうらみを捨てた青い空）

根も葉もないこと言われうろたえる　雅代
（さも本当らしく根をつけ葉をつける）

爺ちゃんは根性根性でお灸すえ　同
（爺ちゃんの口癖根性だ根性だ）

以上五人の若き作家よ、先輩の句を沢山読むこと、沢山作句することが、上達への道と信じて精進されよ。

張った根に名木なりの気品あり　呑歩利
（名木のさすがに根にもある気品）

子が生れ妻の座強く根をおろし　つね
（男児誕生妻の座しかと根をおろす）

雑草の強さどこまで根をおろし　茶々坊
（雑草の根強さ瓦屋根を這い）

週刊誌根もない葉もないことを書き　シゲ
（根は無いがあるように書く週刊誌）

盆栽に水やり過ぎて根がくさり　濁水
（水はもう沢山ですと根の悲鳴）

ボツボツと根よく祖母の編み毛糸　好一
（編棒の根気八十才とは見えず）

根っからの悪党でないだけ涙ぐみ　まさひろ
（根っからの悪でなさそう涙ぐみ）

こんな事根にもっている内攻性　保夫
（これしきのことを根に持つ内攻性）

枯れたように見えても枯れ根が達者　繁子
（枯れきった顔で根深く春を待ち）

食卓にお目見えするはこの大根　秀村
（どの大根抜こうか夕餉の五人前）

年寄は仕事に根気がなくなる　ますゑ
（衰えた根気へ老いの影よぎる）

暴力は世代替るも根を残し　藤持
（暴力の根の絶えもせず絶えもせず）

根分けした菊それぞれに薫る朝　杜月
根で岩を抱え浜辺の松青く　同
（松の根に抱かれて岩の幾星霜）

（松の根のさも重そうに岩を抱く）

本業か趣味か根っからの仕事好き　頼次
あっさりと蹴られて根気の根がぷっ　同
（にせものの根気あっさり蹴飛ばされ）

いつか出る根性信じ切る妻平和　静泉
（いつか出る夫の根性信じ切り）

根っからの職人気質で無口　三十四
（根っからの職人肌です無口です）

根っこの会根性育てあい　同
（根っこの会の固いスクラム美しい）

羽根つきが梯子とパパを呼びに来る　本蔭棒
のろまだが根気のよさは侮れず　同
土根性も遠心分離か都心去り　貞祐
（遠心分離のように土根性都心去る）

年頃に根掘り聞かれてうろたえる　同
根気よく粘るセールス凱歌あげ　つとむ
（セールスの根気に凱歌挙げられる）

精根を果した土俵に拍手湧く　同
（精根の果ての勝星拍手呼ぶ）

根の深い不信裁判を長引かせ　翁童
（不信の根深く裁判三年越し）

事実無根強調し過ぎて疑がわれ　同　陽山
根も無いにまことしやかに花咲かせ
人生は運鈍根の道をゆく　同　露杖
（人生は運鈍根だ今日もゆく）
金婚の夫婦連理の根を張って　同　寛
（連理の根張って金婚の古淡さよ）
精根のつきて己れの位置を知る　同　万竿
風向きに逆らわぬ枝あり松根っこ　同　比呂路
（根日く風に逆らうな枝たちよ）
千松の地を這う根っこに励まされ　同　誓二
（老松の根のたくましく大地抱く）
インフレが貯める根気をあざ笑う　同　生仏
根をからみ合わせて万年青鉢に生き　同　同
（根をからみ合わす万年青へ鉢狭く）
根も葉もないこと言いふらす女　隼人
（根も無いが葉もないことへ姦し）
ミニ娘大根足をさらけ出し　同　茂美
（ミニの娘の大根足へ目をそらし）
床の間で役に立ってる古根っこ　同　千夏
根っからのお人好しです貧乏です　同　志津
どん底の暮しが育てた土根性　同　秋女
負けん気の根性遂に初志はたす　同　利美
（初志をはたして根性を見直され）
根性を通そう頑固といわれても　同　慶彦
苦労に耐え人にもまれたど根性　同　静観堂
（荒波にもまれもまれたど根性）
根のはえたようにお客の重い尻　同　つた子
（根がはえたように招かぬ客の尻）
これしきは笑ってすますど根性　同　同
商人の根性は損も礼を言い　同　同
（商人根性損へも笑顔惜しまない）　カズエ
根元から菊来年の顔を見せ　同　茂美
居心地が良いのか出稼ぎ根をはやし　同　千夏
根無し草ばかりひしめく大都会　同　志津
根っからのずるさを武器にして儲け　同　秋女
根分けして向う三軒同じ花　同　利美
流れ来てここの人情へ根をおろし　同　慶彦
結果には触れず根性ほめてやり　同　静観堂
淀川の水で産湯の土根性　同　つた子
根が無いに花が咲くのが噂だよ　同　同
駄々こねる子に根負けの市場篭　同　同
団交団交宿命的な根くらべ　同　カズエ
平和と友好を根に生きるパンダ　同　同
老残の根もとに柿の実一つ　同　重人
芍薬の根分けすまして虫を聞く　同　同
根も深く思いも深し女どち　同　同
根性はあれど行いともなわず　同　同

雑草の根っこにあった底力　カズエ
老眼の日毎に根気色あせる　同　重人
根つめてつめてコンベアにあしらわれ　同　同
根回しの苦労は知らぬ三代目　同　同

題―（歩）―一月二十日締切（三月号発表）
〒711宛先：岡山県倉敷市下津井三五二
本田恵二朗



第二百五十八回（四十七年度最終回）

大萬川柳「あと味」

入選発表

選者　川村好郎

投句総数　四百八十五句

入選　五十三句

大阪　阿茶

さわやかなあと味残して恋おわる　東大阪　弥生

もう一度逢いたきひとにさせるなと　和歌山　葵水

お調子に乗って喋ってしもた悔い　岡山　柳子

おと味はうちの茶漬でしめくくる　大阪　あいき

あと味の悪い別れにある未練　大阪　柳信

あと味の悪さ無心の友帰えし　鳥取　静泉

あと味を暖め希望の夜を寝る　大阪　修史

あと味がどうのこうのと舌づつみ　大阪　緑水

敗北のあと味しかと噛みしめる　大阪　誓二

あと味の悪さに二度と行くものか　倉敷　梁水

叱られたあと味もよし父の鞭　八尾　悦郎

あと味の悪い別れも手だけ振り　富田林　弥栄子

完敗の汗あと味のさわやかさ　倉敷　里風

あと味が悪いソロバン弾じきすぎ　神戸　どんたく

敗戦のあと味残るルパング島　門真　鉄児

云うだけは云うて気まずさだけ残し　倉敷　千翁

あと味をまだ追うている妻揚子　大阪　進

あと味の悪い土産を置いて行く　鳥取　豊生

あと味を楽しむ今日の日記書く　弘前　貞男

あと味の悪さを残す多数決　大阪　弘生

あと味の悪さがはずむお賽銭　東大阪　三十四

あと味は本物という舌ざわり　岡山　七面山

言いたいだけ言ってあと味考えず　倉吉　苦句

あと味の苦さネオンのあざ笑い　堺　天笑

もう一度お邪魔しますと税吏去に

あと味どこか勘高いコマーシャル　香川　酔夢

あと味のよさ献血で人が生き

あと味の悪さ嫉妬に身を焦し　倉敷　克枝

値切ってもあと味のよい笑い顔

ほろにがいあと味別れしかな握手　大阪　水客

あと味を楽しむごとく受話器置く

和紙の持つ余韻しばらく秋の音　大阪　濁水

聞くとなくあと味悪い噂聞き

押売りのあと味悪い捨てぜりふ　大阪　一栄

あと味へはずんだチップ惜しくなり

言い勝ってみたがあと味つきまとい　富田林　花梢

再会のあと味思い出傷つける

請求書あと味となる胃のもたれ

プロポーズあと味にある胸さわぎ　鳥根　芳子

あと味の余韻は歌で戻って来

弁解がなおあと味を悪くする

ほろ苦いあと味日記だけが知り　岡山　春日

あと味の悪い勝利で歩が重い

あと味の悪さを避けて折れて出る　野心ある酒あと味の悪いこと　佳句

さりげなく別れしあとは虚ろなる　和歌山　葵水

あと味のよさを鏡にわけてやり　藤井寺　吸江

酔ってまだ消えぬあと味持ち帰り　呉　英詩

ジョニ黒のあと味ほめてまた酌がせ　大阪　一栄

あと味を分析すれば惚れている　人ノ句

あと味のにがさが初心呼び戻し　地ノ句

敗いた日のあと味に敗けている　天ノ句

松原　史好

あと味をかみしめ老いをなお生きる　選者吟

あと味も悔いなしベストテン決まる

昭和四十七年度　ベストテン決定

一	笠原　吸江	二一、五	藤井寺
二	小幡　里風	二〇、〇	倉敷
三	河内　天笑	二〇、〇	堺
四	松下　梁水	一九、〇	倉敷
五	三井　酔夢	一九、〇	香川
六	宮西　弥生	一八、五	東大阪

七　藤岡　花梢　一八、〇　富田林
八　堀江　芳子　一七、五　島根
九　正本　水客　一七、〇　大阪
一〇　谷垣　史好　一七、〇　松原
一一　小野　克枝　一六、五　倉敷
一二　小浜　牧人　一五、五　神戸
一三　江城　修史　一五、五　大阪
一四　西出　一栄　一四、五　大阪
一五　木村弥栄子　一四、〇　富田林
一六　槙田　英詩　一三、〇　呉
一七　水粉　千翁　一三、〇　倉敷
一八　遠山　可住　一三、〇　兵庫
一九　小出　智子　一二、五　大阪
二〇　野村太茂津　一二、〇　和歌山
以下略

特別賞
梅里賞　笠原　吸江氏
残念賞　小野　克枝氏
敢斗賞　堀江　芳子氏
新人賞　木村弥栄子氏

昭和四十八年度第二回
「決断」五句以内
締切　一月二十日

第三回「長男」五句以内
締切　二月二十日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三方
大萬川柳係
★
第二十回大萬川柳大会

日時　昭和四十八年一月二十八日（日）十二時半
会場　割烹　大萬（故松江梅里宅）
会費　三百円大会句報等を含む
司会　西尾　栞
開会の辞　若木多久志
挨拶　川村　好郎
柳話　中島生々庵

昭和四十七年度ベストテン表彰
兼題「前進」笠原吸江選
「梯子」小幡里風選
「二十」河内天笑選
「手加減」松下栄水選
「奥」三井酔夢選

席題　二題（当日発表）
兼席題　三句
選者　宮西弥生、藤岡花梢
予備選者　堀江芳子、正本水客、谷垣史好

閉会の辞　菊沢小松園

ベストテンご招待懇親宴

投句のみの方は百円封入（郵券可）各題別に柳箋または便箋に記載の上一月十五日までに左記へ送って下さい。
〒592　高石市高師浜三の五の六
川村好郎
（選者の方で当日出席不可能の方は早い目に御通知下さい。）
主催　大萬川柳会

後援　川柳塔社
割烹　大萬

明けましておめでとうございます
季節料理・折詰
大萬
大阪市阿倍野区松崎町
TEL（623）5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL（211）9184

柳界展望

（原稿締切毎月末）

有信 新之助



緑之助の句碑建立地で右から河南、独仙、草丘の諸氏。背景は日御碕燈台。

▼生々庵主幹はNHKの川柳、山陽新聞の柳壇やNHKの年末には早起きドリの放送など相変らず大多忙。

▼麻生霞乃先生（生駒市）から―ことしの二月で満八十歳になりますと。―気のぬけたビールがよかろ七十九―守られてよいを生きる奈良の鹿―霞乃。

▼片山雲雀氏（大阪市）から―十二月号の巻頭「萩焼き」おもしろし。私も萩で窯元は見て来ましたが坂上さんにはお目にかかれず残念でしたと。

▼河野春三氏（高槻市）四十七年度の秀句抄はなかなかいい句があるようで、川柳塔作家もいよいよ作品にご精進と選者の方々のご苦労大変と存じます。「河野春三句集」四五〇部刷ったが大方売り切れました。―なお川柳ジャーナル社が第二回「春三賞」の作品を募集している。新作十句一月十日締切。受賞作一万円、秀作トロフィ。発表三月号。審査員、小泉十支尾、時実新子、宮田あきら、中村富二、松本芳味、山村祐、河野春三の諸氏。作品は同誌発表句からである。

▼川柳わかまつの主幹山上千太郎氏は九月下旬糖尿病のため小松総合病院へ入院そのために眼の手術が後日にまわされる。

▼四十七年度島根県芸術文化祭で、金賞＝石倉古夢氏。銀賞＝大屋秋峯氏、岡本信吉氏。銅賞＝大峠可動氏（本社同人）石田哲夫氏、長岡鉄花人氏らが受賞。

▼国鉄川柳から一人五十五句を集録した合同句集「五十五」B6横版を刊行。価四百円。事務局奈良市西大寺国見町一の四一一伊藤勢火方。

▼うめだ番傘二十五周年、奥田白虎句集「五風十雨」発刊記念句会が一月十四日十一時から大阪市中央公会堂中集会室で開催。

▼ひろしま川柳会とかも川柳会の十二月号が合併記念号となり誌名は〝川柳ひろしま〟会長は石原伯峯氏、主幹は管生沼畔氏―発行所は広島県賀茂郡西条町朝日町、西条酒造会館内。

▼第七回岡山県川柳大会（白百合川柳会主催）は一月二十一日（日）に邑久郡邑久町邑久公民館ホールで開催。兼題は―器・主義・夫婦・染める・崩れる・列・恍惚・プロフィル・ムード各二句。本社同人選者は川村好郎・岡村久志良・浜野奇童の三氏。投句は百円封入、投句先は岡山県邑久郡邑久町真徳、喜数千代香宛。

▼磯島三石氏（元同人）来日、P64参照。

▼小谷秀一氏（葉子さんの叔父）の第二作「明日への道」がこのほど発行された。〝緒戦より敗戦まで〟と〝敗戦後〟の二部からなる好読物である。文献も正確だし氏の教育者としての主観も見事に全文に躍如としている。

▼**同人の動向**▲

▼若本多久志氏（西宮市）は十一月二十三日尼崎市長から、産業功労者として表彰された。前号で予告した「凡愚のたわごと」は六百円、送料百十円。本社でお取つぎいたします。

▼尼緑之助氏（出雲市）の句碑地鎮祭が十一月二十五日日御碕海岸でおこなわれた。

▼川竹松風氏（高知市）が主宰する高知川柳社は平安川柳社の福永清造氏を迎えて句会を開かれた。

▼臼井三林坊氏（倉敷市）の義甥加藤武徳氏が知事選、弟御加藤六月氏が衆院選と、その応援に大奮闘された。

▼菊沢小松園氏（大阪市）は十一月南紀勝浦へ観行旅行―ヌードにはもう飽きました齢のせい―小松園。

▼小川静観堂氏（伊丹市）は勤労感謝の日、薫風、新之助、葉子氏らを一庫へ招待、錦秋の一日を歓談。不二田氏は執筆多忙で不参。

▼森井菁居氏（竹原市）は十一月十日から松山を経て高知足摺岬へ旅行―すべて

絵に尽きる怒濤を見てあきず。

▼小笠原有里氏（今治市）は火災に遇われてから復興までの一年間の心労のため肝臓病で四十日程病臥中の処復調また活動される。

▼堀江正朗氏（島根）令嬢と、松浦敏彦氏（松下電機技術係）との挙式が一月七日松江市むらくも会館で午後二時から行なわれる。

▼渡辺暁章氏（愛媛）は十一月七日四女容子さんの新居へ、新婚旅行中の留守番に来阪、外出不能のまま留守居役を果して帰られた。

▼羽原静歩氏（守口市）は豊岡川柳天守閣七周年記念句会へ出席―耕うん機空の青さへこだまする。また十一月十四～五日小豆島へ懇親旅行―そうめんはツルツル島の秋が澄み。

▼久家代仕男氏（島根）の自宅が昨夏の水害で被災されたが、地上げをして十一月末には畳も敷けるほどに復興された。

▼尼緑之助氏（島根）が当番の島根県川柳大会は出席七十余名の盛会。文芸協会（仮称）の発起人会が開かれ近く結成される運び。

▼小出智子氏（大阪市）は十一月若い人たちと明日香路へサイクリング、若やいだ一日を送られた。―自家用を横付けにして稲を刈り。

▼山田季賛氏（広島県）から日記ふうの旅信ぞくぞく。

▼久米奈良子さん（東大阪市）は東大阪市文化祭参加書道展で東大阪書道協会賞を得られた。

▼大矢十郎氏（新宮市）松山道後温泉から―栗林の松ひねくれて鯉は肥え―十郎。

▼本田恵二朗氏担当の〝初歩教室〟へ新入学した中西つた子さんは、氏のおばさんで、阪神電鉄副社長中西正二氏の母堂で八十二歳。

▼森田布堂氏（鳥取市）奥谷弘朗氏（倉吉市）渡辺独歩氏（倉吉市）清水一保氏（鳥取県）は、倉吉市教育委員会主催の文芸コンクールに上位入賞を本社同人で独占された。

▼八木摩天郎氏（堺市）宅で昨年十一月十三日故白柳氏の三回忌追善句会が堺・駒つなぎ・若芽三柳会合同で催され、遺族の清水健司氏も出席された。なお摩天郎氏から故路郎先生などが入会されていた堺市吏員O・B機関紙に物故会員の作品が掲載好評だったと。

▼築山快夢起氏（ハワイ）来日、P64参照。

▼梅谿庵不酔氏（姫路市）はライオンズクラブのメンバーから趣味のアンケートをとったところ、川柳は氏一人で、鼻が高いやら心細かったと。

▼四方天弘実氏（小松市）の尊父が十一月に逝去された。―父と母寄せて骨壺地に還す―弘実。

▼新岡回天子氏（唐津市）の新住居は、佐賀県唐津市東町五五。短冊展は盛会。

▼不二田一三夫氏はB5版市販となった〝芸術文化〟新年号へ「川柳年賀状」を執筆。

▼南海川柳会―一月十八日―題―道連れ・気まま・型破り―会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会―一月二十日（土）午後六時―題―大型・コーチ・無造作・ねばる―会場は北生野町一丁目光明寺。

▼川柳東大阪―一月二十七日―題―牛・玄関・初夢・光る―会場は東大阪市中央公民館第二集会室―会費二百円、投句百円。

新同人紹介

大峠可動
―緑之助・好郎推薦

林裕子

雪本珠子

渡辺智恵子

神藤歌子
―操子・生々庵推薦

新賛助会員

喪中につき年賀欠礼いたします

宮尾あいき

本社十二月句会

会場　以和貴荘

七日　午後六時

72年度のさよなら句会。本年は二十五名の全出席者、たった一カ月で惜退した人もあった。

古方氏の柳話は、題して〝古方句集自序〟その発端などを語られたが、句集をまだ持っていない人の方が多いのではないかと思われた。

月間賞杯は飯田悦郎氏に輝き、これで本年はいずれも一回獲得者ばかりとなった。(F)

規定どおり十二氏の一年間の天位数によって永久保持者が決定するので調べてみると、中島生々庵氏が四回、夢成氏が二回、肖二氏が二回、花梢氏が二回だった。ここに四十七年度の月間賞杯永久保持者は生々庵主幹ときまる。

さあ、またガンばりましょう。

(有信新之助)

(河井庸佑整理)

出席―静馬・太茂津・新之助・与呂志・古方・柳志・一三夫・百酒・たかし・美幸・俊夫・文秋・喜風・儀一・柳宏子・一舟・滋雀・清人・肖二・いわを・葵水・千万子・水客・瓢太・三十四・誓二・好一・敏・葛城・重人・悦郎・維久子・牧人・宣介・三郎・綾女・吸江・鶴声・多久志・天笑・いさむ・南柳・柳信・形水・凡九郎・酔々・祐司・岳人・六龍子・庸佑・頂留子・清女・小松園・一二三・栞・薫風・金三・鬼遊・葉子。

席題「社会鍋」　笠原吸江選

社会鍋煙草のつりを善意とす　牧人

社会鍋隣のサンタがビラをくれ　敏

待合す場所にしてるのに社会鍋　小松園

つり貰う訳にも行かぬ社会鍋　たかし

社会鍋人のこころを踏絵する　酔々

銀行の前が足場の社会鍋　滋雀

社会鍋オレひとりぐらいどっちもいい　葵水

北風も逆うとこに社会鍋　小松園

人生譜満たすに遠い社会鍋　太茂津

せがまれて子連れが見てる社会鍋　古方

好景気誰ふり向かぬ社会鍋　多久志

社会鍋先手の銀貨につい釣られ　儀一

社会鍋心の垢も入れてくる　太茂津

社会鍋から見た人間はみんなケチ　一三夫

スモッグがもろとも包む社会鍋　古方

社会鍋身成り目立たん人が入れ　一舟

社会鍋スリがはんぱを入れて行き　天笑

貧者の一灯好い気分なり社会鍋　柳信

社会鍋女兵士の声が嗄れ　竜子

社会鍋財布の温み移し置く　たかし

社会鍋コトンと返事してくれた　凡九郎

気紛れで入れたのもある社会鍋　形水

あんな人が素通りをした社会鍋　凡九郎

社会鍋自己満足の役もする　太茂津

票政をせめて皮肉る社会鍋　俊夫

寒空の点景にされる社会鍋　祐司

メガホンへ協力まばら社会鍋　静馬

空前のボーナスの街に社会鍋　新之助

社会鍋師走のアクセサリーになり　柳宏子

社会鍋チョッピリ入れて心充つ　好一

社会鍋委ねる政治がゆれている　与呂志

社会鍋法華の太鼓とにらみ合い　静馬

社会鍋ミリタリールックの背が寒い　新之助

カサコソと小銭を入れた社会鍋　柳宏子

社会鍋美人の方へよう入り　好一

落葉焚く炎にあたたまる社会鍋　酔々

社会鍋へ背伸びする可愛い手　重人

社会鍋小いさい風の渦拾う　宣介

信号を待つ間に入れた社会鍋　天笑

百円で世界を救った顔となる　美幸

チャラチャラと十二月が泣く社会鍋　三郎

社会鍋の底に棲んでる白い鳩　酔々

社会鍋善意を入れた音がする　肖二

手垢ついた金が尊い社会鍋　一二三

靴磨きの横に陣取る社会鍋　吸江

席題「選ぶ」　香川酔々選

選ぶにはちと物足りぬ人の顔　いわを

選ばれてから貫ロクの腹もでき　三郎

候補を選ぶに功罪つい忘れ　喜風

よりによって汚職議員に入れた悔　天笑

ひらかなに替えても票が集らず　俊夫

選ばれた日から空見て歩くせ　俊夫

やっと気に入れば向うでことわられ　文秋

選びぬいた筈がと家裁でくやしがる　頂留子

とは言えどやっぱりえらぶ顔かたち　六竜子

ただひとり選んでバカの愚妻のと　俊夫

選び抜かはった割に嫁はんブスやった　瓢太

飽くことを知らず母娘の呉服撰る　柳宏子

特売の無疵を選ぶ市場籠　誓二

宝石を選ぶ幸ある日が近く　一三夫

品ずれの傷も選ぶ手見のがさず　頂留子

オッさんにしかられながら桃選ぶ　敏

値段だけ選んだらしい歳暮くれ　天笑

ヒビ割れの手が伸びている特売場　美幸

選びぬいて結局もとの柄に決め　瓢太

ディスカバージャパン私は古い里選ぶ　太茂津

粒選りを蒔いても豆の出来不出来　葛城

持参金いつしか選ぶ側となり　祐司

言い訳の間にある友を先ず選び　葵水

選びようないスリッパが並べられ　天笑

子が選ぶ人物妻と父を書き　岳人

天覧の栄に選ばれ餅を搗く　滋雀

菊人形主役に厚い菊を選る　葵水

選ばれて今日を眩しい席に居る　酔々

席題「終電車」　**岡橋宣介選**

終電の時刻も幹事引き受ける　柳信

ホステスが女にもどる終電車　三郎

トイレまで行く時間ない終電車　儀一

終電車夫婦で乗るとよく目立ち　薫風

財布もう軽い同士の終電車　喜風

トランジスター聴いているのが居る終電車　形水

終電車都会の裏をのせて揺れ　滋雀

お疲れさんなんて誰もいわない終電車　古方

使うた金計算してる終電車　一三夫

焼酎の息がからむ終電車　六竜子

酔うている酔うてえへんが終電車　多久志

終電車ご機嫌同士馬が合い　儀一

赤い顔青い顔ある終電車　美幸

稼がれた男もまじる終電車　三郎

終電車このホステスも若くなし　柳志

正座した女が寝てる終電車　美幸

終電に乗れた安堵が寝てしまい　文秋

終電車この人何処へ去ぬのやろ　与呂志

満員で一人ぽっちの終電車　柳信

終電車ドラマ一齣綴り終え　太茂津

終電車対話のない距離をおく　水客

終電車駅の広さを見直され　吸江

終電車その片頬の美しさ　宣介

兼題「ローン」　**垂井葵水選**

ローン済む頃にこわれるタイミング　どんたく

貯金熱さめてローンに鞍替えし　金三

ローンという魔力に自制あやつられ　秀子

一寸先闇とは思うていぬローン　凡九郎

のしかかるローンへ宝くじを買い　儀一

ローンでもきれいな我が家の花壇　重人

ローン掛ける頃神経痛疼く　小松園

無料で貸すようにローンをふりまも　柳宏子

三〇年先まで借金してしまい　瓢太

嫁はんと子供以外はみなローン　天笑

デートにも話題ローンの夢に触れ　喜風

ステレオが銀行ローンの音で鳴り　清人

ローン借って赤い屋根にする話　栞

サラリーマンの詩はローンで綴られる　一三夫

偶に羽目はずしてローンから逃れ　儀一

このからだだけはローンと違います　天笑

遺言にローンも頼むかすれた字　一二三

ボロ家でよろしローンの紐がない　清人

ローンで買えても金のいる話　多久志

共稼ぎローンが子供を作らせず　与呂志

生きていることがローンやとも見えず　古方

ローンまだ済まず修理に追われてる　柳信

利息表見つめ重荷のマイホーム　千万子

借金はきらいローンはしています　綾女

背伸びさす魔力を秘めているローン　凡九郎

ローンには触れぬつもりの柿をむく　悦郎

自分にも出来るローンに口を出し　いわを

ローンなどかわりもなし作業服　太茂津

姓名にふり仮名つけてローン借る　静馬

ローンみなすむまで会社持つかしら　清人

ローンには触れず聞取を賞めてくれ　水客

冷えきってローンにも似た夫婦いる　柳志

貸している証拠地鎮祭に招ばれ　形水

デパートのローンに顔がきく自慢　葵水

新しくローン禁酒を誓わされ

兼題「表沙汰」　**西田柳宏子選**

表沙汰になって皆ながホットする　季賛

表沙汰人気を当てに嘘も言い　藤持

重役の椅子うばわれた表沙汰　祥月

遺産もめ血の穢なさを表沙汰　一栄

表沙汰にせぬから痴漢増長し　晩歩

そっとしておきたい善意ほじくられ　清女

示談金もつれて事件が表沙汰　清人

表沙汰になって役人ちぢこまり　葵水

封建思想どこかに匂う表沙汰　金三

表沙汰になってあわてる子の非行　静馬

なるようになったところで表沙汰　古方

引っ込みがつかなくなった表沙汰　肖二

真相と言う名で語る表沙汰　凡九郎

週刊紙ペンを刃物にしてあばき　一二三

表沙汰妥協の裏でもめ続け　清女

表沙汰にされては困る事故にあい　瓢太

肩書きの名刺がまるめた表沙汰　六竜子

早いことケリつきまして表沙汰　天笑

殺された女が持っていた名刺　鬼遊

表沙汰にさせぬ相手の泣き所　あいき

出る所へ出やう正義語をまげず　六竜子

重過失少年Aにして置けず　滋雀

出るとこへ出まひようと話もれ出し　好一

表沙汰にして人権を守り抜き　維久子

表沙汰になって家出へ踏切らせき　三十四

表沙汰にして陽の当らない坂越える　水客

マッチする手が震えてる表沙汰　酔々

真相を底に沈めた表沙汰　美幸

表沙汰になって雑草消えるとき　水客

表沙汰になれば腹切る役も決め　柳宏子

兼題「腹芸」　**本多柳志選**

腹芸の出来ぬ単純さも買われ　秀子

腹芸がそぶいている二枚舌　章雅

朝帰りへ妻さりげない笑顔　あいき

スト回避した腹芸をみとめられ　文秋

オイこれで払えと札入れ放り出し　静馬

はったりも腹芸男一匹賭けてみる　太茂津

見えすいた腹芸女の浅き知恵　多久志

貫録の違いは腹芸よみとれず　柳宏子

シテとワキその腹芸へ幕降りる　酔々

腹芸の通ぜぬ相手もてあます　綾女

腹芸を計算しての黙秘権　柳信

交渉に腹芸うまい人を選り　文秋

男同士何にも言わず手を握り　瓢太

大物がやれば腹芸とも言われ　百酒

腹芸へさすが年期の巾を見せ　庸佑

腹芸と知らずに妻は不貞くされ　俊夫

腹芸の分る相手と思うてず　水客

腹芸が泣きたい時もある笑顔　重人

腹芸と腹芸おんな酌ぐばかり　俊夫

貫録の差は腹芸で逃げられる　滋雀

腹芸は女房に使うものでなし　吸江

腹芸と知らぬ若さが走らされ　小松園

腹芸などいらず凡人どうしなり　水客

腹芸が大事な時に見破られ　肖二

腹芸で男の顔を広くする　三十四

肩たたき合って腹芸打ち明ける　葵水

腹芸を無策の穏れ簑とする　牧人

腹芸の握手と知って血が燃えず　一三夫

迷ってるのを腹芸と間違われ　小松園

秘書からのメモの通りにとぼけられ　柳志

兼題「耐える」　正本水客選

淋しさに耐えてる顔と娘は知らず　あいきどんたく

耐えること性ともなりて定退す　栞

この島のかくれクルスに耐えし墓　静馬

束の間を耐えるゆとりのない若さ　岳人

天と地に耐えた墓標を洗う雨　一三夫

耐えに耐えああ玉音のあの刹那　いわを

積雪に耐える姿を軸に見る　重人

耐える美を明治の母の背に見る　喜風

幾星霜耐えて礎石は語らない　形水

耐えることなどは知らないもやし族　水客

耐えてきた苦労を握手で紛らわし　吸江

発展へなどと忍耐強いられる　形水

まだ耐える限界あると第三者　清女

下積みに耐えてすねたり曲ったり　葵水

耐えること久し私の固い椅子　多久志

積雪に耐えて可憐な水芭蕉　肖二

大寒も小寒もなく緞振る　葵水

二字ですむ忍耐今日も忘れてた　凡九郎

男一匹両手に耐えるものを持ち　天笑

耐え抜いた母の背中にある丸味　柳宏子

マゾヒスムスという耐え方もおまんなり　古方

女という字が耐え抜くよと見えずか　凡九郎

或る時は耐えて甲斐しょなしにされ　百酒

綯帯のゆるみに耐える挫折感　悦郎

耐えるだけ耐えて相手の性を知り　葛城

一と言をこらえて兄に花持たす　静馬

とことんは耐えられへんが耐えてなる　古方

一生の不作を互に耐えただけ　滋雀

執拗な値切りに耐えて売れ残り　太茂津

你好你好今日でも鴨の脚のまま　古方

耐えること知って夫婦の味がでる　敏

ハンカチの白さに耐えている喪服　酔々

耐えるより他なしこれが定めとも　好一

盃へ不満満たしてひとり耐え　牧人

耐えることおぼえ夫婦の彩となる　天笑

耐えている男の眉は動かない　一三夫

どうしようもないので耐えただけのこと　百酒

耐えてきたまるみが肩に石仏　重人

みんな何かに耐えてはる生きてはる　凡九郎

盲愛が耐える力をむしりとり　文秋

耐えること武器の如く妻黙す　与呂志

山茶花の白に耐えてる風邪心地　宣介

七光りないが耐え抜く血はもろい　一舟

冬オーバー冬の形に耐えている　悦郎

拳のなかへ言いたいことを溜めてく　水客

賀　春

川柳東大阪

東大阪市川柳同好会

会員一同

冨柳会

藤岡花梢

岩田美代

木村弥栄子

和田維久子



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

駒つなぎ（前号のつづき）　岸　南柳報

隣席のポルノへ我れを見失ない儀一
隣席のポルノへ雑誌盗見する弥栄子
見てるよで見ぬよでポルノ横目で見摩天郎
校長はポルノ縁ない顔でいる悟郎
スレスレの線でポルノ稼いでるみよ
仲の良い夫婦ポルノへ瞳をそらす岳人
よく撮れているとポルノにふれずほめ規一郎
映倫もひらけはったなポルノ小松園

南大阪川柳会　金井文秋報

詰所まで来ると守衛の顔になり文秋
ぬいぐるみ脱いで舞台の汗を拭き柳志
恍惚の人を抱えて疲れ果て綾女
ぼろくそに言われ余韻のあたたかさ滋雀
プライベートな話詰所の奥です古方
気苦労を聞いてる方が気が疲れ好郎
お気の毒ですがと医師は時計見る柳宏子
余韻ある恩師の意見かみしめる水京
新任の署長を採点する詰所形水
念に念入れて快心の顔になりあいき
快心の勝利誇らず運にすべき喜風
もう人の居らぬ詰所にだるまだけ儀一
薄給の身に気疲れがつきまとい肖二
快心の積木がパパやママを呼び一舟

ひと節を歌っただけで鐘が鳴り酔々
デパートの保安詰所で泣く女金三
ほらを吹く主快心夜も深く百合
我が子でもたまに帰れば気が疲れ君子
ふんいきに何かあったかきく詰所千万子
詰所にも愛嬌振りまく出前持ち誓二
気疲れの顔は鏡に見抜かれる市郎
快心はぐっすり眠れた朝の秋一栄
色だけが一人前の詰所の茶葵水
葬儀屋も気疲れ出ぬよう云って去に静馬
三つ指でむかえられてる気の疲れ花梢
退院へ詰所通いが派手になり柳信
窯出しの一点に眼が輝きぬ新之助

川柳たけはら　森井菁居報

赤い爪子に叱られた参観日繁男
駄馬駆ける貧しい身なりが笑えない扇水
見れば見るほどわからないピカソ展義久
みち足りたこころひとりの箸をおく酉合
女性との対話は歳に触れずいる英詩
石垣の苔生き生きと雨上る一路
パレットへ故郷の空の色をとく鬼焼
この道はいつか来た道では済まぬのばら
故障したテレビへ秋の夜が長い雅鳳秋
出勤の歩巾ピッタリ駅に入る政己
アドバルン気ままにさせる紐がつき
ハイティーンみたいな服でふり向かれそのみ
妻を書くドラマは一直線でよし菁居
口答えせずに黙った目がきつい貞子
母の背も父の背も越しひとり子蘭幸
魚の目をふっとみつめるのも秋かぼ不朽
とうさんかあさんありがとうだけがいえ浄美
おくれ毛の長さよ女恋を知る笑子
おむすびも作れるごつい父の手よ静水
そうと決って着るもの髪のこと房子
帆船が絵になる海が汚れても葵水

川柳塔まつえ　祥月報

干渉もなく無視されて居るくらし鈴子
何が言いたいか思春期の涙ぐせ英城
夫夫婦人投書欄洋々
朝顔の浮気隣りの垣を越す英子
義理一つずつ秋風がせきたてる千代子
母と娘の対話すき間のない話雪美
争いのあとほろ苦き茶をすすり澄水
税金の無駄がうずまく排気ガス鳳人
ひとにぎり土を抱いて雛村する越子
気がつけば経済大国よごれすぎ芳月
三代盛装晴れの渡り初め愚童
悪知恵の働くやつで親ゆずり万栄

（以下次号）

▶おわび◀　スペースの都合で「どんぐり」「まるべに」「東大阪」「ささやま」「ウイロー社」「南海」「よしなが」「七面」「丸文」「城北」「川柳大阪」次号に回りました。　（編集部）

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区堂島町1

・ペンペン草・

★あけましておめでとうございます。

★本誌の定価改正、諸事情をご推察のほど、お願いいたします。

★富士野鞍馬先生がご病気をおして「川柳中仙道六十九次」の第一篇を送ってくださったがスペースがなく、残念ながら次号以後になりました。

★東野大八先生には早くから新年原稿をいただいていたが、編集まぎわになって「想を練り直すから」と、新たにまた書いてくださった。ありがたいですね。

★春巣副主幹には〝ゆーもあ特集〟第一回からご執筆ねがい、本号で八年目になる。〝笑い〟に関する書籍をこの特集にそなえて日頃から集めておられることは一読歴然である。このような書き手がおられることは強いですよ。

★霞乃先生が書いてくださることになった。こんごは文献として残るものも発表されるとおもう。ご期待ください。

★正本水客氏に〝新年吟について〟をご執筆ねがった。ぼくはまだ年賀状に句を入れたことがない。毎年元日から二月号にかかるので正月がピンとこないのかも知れない。

★大正十三年創刊いらい、なじみ深い「近作柳欄」を「水煙抄（すいえん）」と改名？した。川柳塔創刊前夜、ぼくは改名案を出したが時期尚早ということで今日に至ったのである。

★川柳塔社のことを、川柳「塔」社という人がある。わが社は〝川柳塔〟なので、この〝水煙〟が、より誤解されないかと、ちょっと心配である。

★本年もよろしくご支援のほどを。（不二田一三夫）

葉子コーナー

▼不二田夫人の寝たきりのご母堂から手編みの財布をいただき、とても八四歳のご高令とは思えぬ芸術品でした。お部屋には豆秋さんの短冊もあるという豆秋ファンだそうで、私はこの縁起のよいハル財布を一生のお守りとして大切にしなくてはと思っています。

・本誌定価改正・

印刷費の値上げなどで新年号から購読料を一部二百円にいたします。なお現在お払いこみの方は次回お申しこみの分から改正料金でお願いいたします。

（同人費は据え置き）

よろしくご協力のほどお願い申しあげます。

川柳塔社

・募集・

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選

水煙抄（10句）菊沢小松園選

課題吟（各題5句以内）

「ピカ一」高津徹也選

「迷い」大江秋月選

「本家」大山と金選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選

水煙抄（10句）北川春巣選

課題吟（各題5句以内）

「踊る」葛城伊三郎選

「合い鍵」村上旭童選

「鼻っ柱」青木遊星選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

おめでとうございます

定価 二百円（送料十六円）

半年分 千二百九十円（送料共）

一年分 二千四百円（送料共）

昭和四十七年十二月二十五日印刷

昭和四十八年一月一日発行

編集兼発行人 大阪市南区綿谷仲之町二〇番地 中島蓬太郎

印刷所 大阪市南区綿谷仲之町二〇番地 大陽印刷株式会社

発行所 郵便番号542 大阪市南区綿谷仲之町二〇番地 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八五番

振替口座 大阪・三三三八八番

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

＜ホテル・旅館＞

◆白浜温泉
国際観光旅館 朝日
国際観光ホテル ホテルパシフィック

◆勝浦温泉
国際観光旅館 中の島

◆湯峰温泉
国際観光旅館 湯の峯荘

◆新和歌浦
国際観光旅館 萬波

◆徳島鳴門
国際観光旅館 鳴門
国際観光旅館 鳴門公園ホテル

◆紀北橋本
観光旅館 紀の川苑

◆泉南淡輪海岸
観光旅館 淡の輪苑

◆大阪なんば ホテル南海

お問合せ・お申込み 南海交通㈱
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06—(631)—0222

南海電鉄

蓬莱商品の目印
551

豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば 蓬莱 TEL(641)0551～2

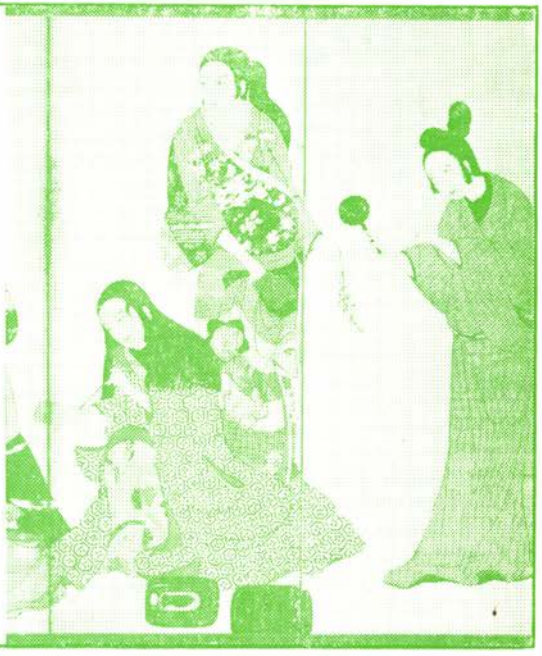
出張販売店
なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十七年十二月二十五日　印刷
昭和四十八年一月一日　発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五四八号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄





一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影

定価二百円（送料十六円）